

## 資料

### 長与又郎日記 昭和十二年十月—十二月

照 沼 康 孝  
中 野 実

#### 一、はじめに

ここに紹介するのは、東京帝国大学元総長長与又郎の日記のうち、昭和十二年十月一日から同年十二月三十一日までの三ヶ月間の日記である。以下、長与又郎の略歴と日記の概要、本稿収録分の内容について解説する。

#### 二、略歴と日記の概要

長与又郎は明治十一（一八七八）年四月六日東京神田駿河台北甲賀町八番地で、当時内務省衛生局長であった父専斎、母園子の第四子、三男として誕生した。長与家は大村藩々医の家柄であり、父専斎は緒方洪庵の適塾に学び、統いて長崎の医学伝習所に学んだ。更に彼は明治維新後岩倉具視遣欧使節に加わって医学教育調査、衛生行政調査を行い、帰朝後文部省医務局長となり、医務局の内務省移管、衛生局への名称変更後も局長として十九年間在職し、後に元老院議員、貴族院議員となった。明治二十五年には宮中顧問官となり、同三十三年ベスト発生時には臨時検疫局総裁、翌三十四年には大日本私立衛生会会頭に就任したが、三十五年九月死去している。その後明治四十三年又郎の兄である専斎の長男称吉は父の功により男爵を授けられている。

又郎の兄弟は長与胃腸病院院長となった長男称吉、後に松方正義長男巖の妻と

なった長女保子、実業会に身を投じて茂木合名理事となった次男程三、十五歳で不慮の事故死をした次女藤子、岩永家の養子となり、後同盟通信社社長となった四男裕吉、又郎の友人医学博士平山金蔵に嫁いだ三女道子、そして白樺派の作家として知られる五男善郎の七人であった。

又郎は明治二十二年学習院中等科に入学、のち慶応義塾幼稚舎に転じ、更に正則尋常中学校に編入学、明治二十九年第一高等学校第一部（文科）に入学し、翌年同第三部（医科）に再入学している。この間日清戦争の影響もあってか海軍を志し、後には法科を目指したが、父専斎の説得により医科を志望することとなった。

明治三十七年東京帝国大学医科大学を卒業した長与は翌年医科大学助手となり、病理学教室勤務を命ぜられた。四十年から二年間ドイツに留学し、帰国した後四十三年東京帝国大学医科大学助教に任ぜられ、更に病理解剖学第二講座分拒を命ぜられた。また同年、四十一年四月に総裁を桂太郎、会頭を青山胤通として病理学教室内に設けられた癌研究会評議員となっている。この年森村財閥の一員である森村豊の娘玉子と結婚している。明治四十四年長与は東京帝国大学医科大学教授となったが、翌年急性腎臓炎に罹り、回復までに半年以上を要している。彼はその後大正九年、昭和五年、昭和七年に大病をしている。

大正三年に又郎の教授在職中に惹起した大きな問題が伝染病研究所移管問題である。伝研は当時内務省所管であったが、それが東京帝国大学の管轄下に移されることとなった。しかし、所長北里柴三郎以下所員の多数がこれに反対し、

このために長与が北里の説得に当たっている。この説得が効を奏したためか伝研側の反対も北里の辞職により収拾され、文部省より出された伝研分割案も中止され、無事伝研は東京帝国大学に移管されることとなった。そして、長与も伝研技師を兼務することとなり、更に大正八年には所長に就任している。この間大正四年より恙虫病研究に着手し、以後十五年間この研究を継続している。

大正十一年東京帝国大学評議員となり、昭和六年まで勤めている。昭和二年一月大正天皇崩御に際し殯宮に奉侍し、昭和四年四月には癌研究会会頭に就任している。昭和八年東京帝国大学医学部長に補せられ、いわゆる思想問題にも種々対処している。

昭和九年十二月二十七日長与は小野塚喜平次総長の後を襲って東京帝国大学総長に任ぜられた。以来昭和十三年十一月に辞任するまで約四年間東京帝国大学総長の職にあった。

その間東京帝国大学では美濃部達吉の天皇機関説問題、矢内原忠雄教授辞職事件、大内兵衛教授等の人民戦線事件、荒木貞夫文相による大学改革問題等の大事件が統発し、総長としての長与はこれらへの対応に苦慮することとなった。このうち矢内原忠雄教授辞職事件については本稿収録分の内容解説で更に詳述する。総長在任中長与に対して第一次近衛文麿内閣、林銑十郎内閣の二度内閣の成立時に文部大臣就任交渉があったが、長与は両方ともこれを断っている。この間昭和十年四月には「癌腫の原因について」と題する御前講演を行い、翌十一年には帝国学士院会員となっている。昭和十二年十二月には教学局参与、教育審議会委員となっている。

昭和十三年東京帝国大学総長退任後、長与は東京帝国大学名誉教授となり、癌研究所所長に復している。その後各種の役職を歴任し、昭和十六年四月日本癌学会を創立し、その会長に就任したが、六月に発病し、八月十五日男爵を授けられ、翌十六日薨去、同日勲一等瑞宝章に叙せられた。享年六十三であった。遺骸は長与の遺志により病理学教室で解剖され、更に父専齋等の眠る東京青山墓地に葬られた。

『長与又郎伝』（昭和十九年、長与博士記念会）によれば、明治二十六年八

月十七日から臨終前日の昭和十六年八月十五日までの長与日記が残されている。この間父専齋死去直前の明治三十五年八月から四十年七月までの五年間、妹藤子事故死の二十七年八月十四日から半月間は多忙、悲しみ等のために日記は中断されている。長与が実際に日記を記し始めたのは明治二十五年一月一日からであるようだが、それから翌二十六年八月十六日までの一年七ヶ月余の分は既に亡失され、残されたものの最初は「日記第三巻」と記された和綴、毛筆のものである。その「日記第三巻」の巻頭には、

余ハ他日如何ナル者トナリ世ニ立ツカ少年ノ日ヨリ予メ知ル可ニ非ズトモ今日ノ少年タル者誰カ此優勝劣敗ノ大戦場ナル社会ニ立テテ予期スル所ナカザランヤ然レバ少年ノ時ヨリシテ己ガ境遇ノ順逆苦楽貧富ノ有様ノ如何ニアリシカ是等ノ事ヲ記スル他日自ラノ伝記ヲ編ムノ材料ヲ留ムルハ日記ヲ措テ更ニ他アルナク愈々我品行ヲ高クシ益我学芸ヲ精スルノ一大工夫也

明治二十四年十二月三十一日余ハ始メテ尊父ヨリ日記ヲ書ク事ヲ覚ヘ爾後今日ニ至ル迄或ハ陽春陽花ヲ分テ旅行セシ時モ又ハ嚴冬炉ヲ囲テ雪ゴモリ成セシ時モ決シテ怠ラズ拙筆ニマカセテ日記ヲ止置シガ此頃ニ至リ過去ノ日記ヲ緝キ或ハ良心ニ愧ルノ記事切齒ニ堪ザルノ文字又潸然トシテ悲ムベキ事机ヲ打テ快哉ト呼ブノ跡説ミ行ニ從ヒ恰モ人生ノ「ばのらま」妄想ノ写真ヲ観ル如ク種々現象ノ続々トシテ出沒極ナキヲ見テ余ハ益々日記ノ必要ト快味ヲ感ズル事深シ想フ僅カ歳余ニ於テスラ既ニ如此是レヲ若シ十年二十年進ンデ五十年ノ後ニ緝キ見バ果シテ如何アラムと記されている。

明治二十九年九月四日から日記は、「第四巻」に入ったが、その序文は父専齋が次のように記している。

日記トハ日々年中ノ行事ヲ記録シテ備忘反省ノ用ニ供スルモノナリ暮夜寝ニ就クニ臨ミ昼間ノ事ヲ記スルヲ常トシ一日モ怠リナケレバ自然ニ課程ヲ恪守スルノ習慣ヲ養成シ兼テ行文ニ熟シ記事ヲ敏ニナルノ利アル等其益少ナカラズ而シテ余ガ特ニ汝ニ命シテ日記ヲ課スル所以ノモノハ前述利益ノ外更ニ望ム所アリ凡ソ人ノ一言一行ハ幼弱ノ時ト雖モ苟クモスベカラザルモノニシテ

皆必ズ信アルヲ要ス言フ所ハ必ズ行ヒ行フ所ハ必ズ達スルノ覚悟ナカルベカラズ然レドモ言行ヲ信ニスルハ人事ノ極メテ難スル所ニシテ或ハ外辺物情ノ變遷移動ニ因リ或ハ自己境遇ノ變化ニ因リテ其言行ヲ信ズル能ハザルガ如キハ巴ムベカラザルガ如シト雖モ尚且弱志ノ憾ナキヲ免レズ況ヤ苟モ言ヒ輕々シク行ヒ徒言浮行恬トシテ自ら怪シマザルガ如キニ至ツテハ<sup>不</sup>タ士君子ニ齒スルヲ得ズ什麼ノ學術才能アリト雖モ其道ヲ行フニ由ナン余ハ汝曹ノ日ニ其言行ヲ記スルニ当テ暮夜<sup>不</sup>寝人ナキ処理想一番能其心ニ愧ヅル所ナキカ前日ノ言行ニ反スル事ナキカラ反省シテ自ら警シ事ヲ望ム

明治廿九年九月四日

專 齋

和綴の日記は三冊だけであり、その後は洋式のノートにペンで記していたようである。長与日記の原本は現在女孀清水文彦氏、三男健夫氏の元に保管されており、筆者等がこれまでに閲覧を許されたのは、清水文彦氏保管の主に大正期後半、昭和期の日記である。この大正期後半、昭和期の日記は、全てB5判、布製表紙付、百頁弱のものであり、これを一年間に二〜三冊使用している。

さて、これまで閲覧できた分について述べるならば、この長与日記も他の多くの日記と同様に、記載された内容は公私に亘る種々の事項に及んでいる。しかし、極く日常的な事柄、生活習慣といったものは省かれており、家庭内の事項も外出、来客などの非日常的な出来事がほとんどである。日記の記述の多くはなんとといっても東京帝国大学を中心とする公人としての事項であり、また時として時事問題も記されており、それは戦時体制になるにつれて増加している。これらの記述の多くは長与自身の判断、意見などを加えずに事実経過を丹念に追ってなされている。特に各種の会議、面談などにおいては自身を含めた各出席者の発言がかなり詳細に記されている。そして、こういった記載の重要問題と思われる部分にはサイド・ライン、小見出などを付し、後日再確認したことが窺われ、この日記が長与自身の「備忘録」として重要な役割を果していることが察知できる。

最後に長与又郎に関する著述などを挙げておこう。長与の生涯を通して記述

されたものは前掲の『長与又郎伝』である。本書は長与の死後、昭和十九年四月に上梓されたものであり、医科大学時代からの親友である南大曹を委員長とする長与博士記念会によって編纂された。その内容は長与家祖先、父専齋に関する事項、そして又郎の誕生からその終焉までを又郎の公私両面に亘り、更に専門研究にも目を配って記述されているが、既に前半生に重点がおかれ、死の直後に編まれたこともあって、当時比較的近い過去であった東京帝国大学総長時代の、特に学内行政については簡単に記されている。しかし、全体としてみればかなり客観的に、かつ妥当と思われる叙述がなされている。そして、資料として日記が各所に引用されており、読む者に臨場感を与えている。筆者もこれにより長与日記の存在を知り、その内容の豊富さを想像し、閲覧させて戴きたいと考えたのである。

この他、長与周囲の人々により比較的短い論文、思い出といった類のものがいくつか発表されている。それらは管見の限りでは、「科学者としての長与又郎先生」（三田村篤志郎、科学二二〇六、昭和十七年）、「科学者としての長与又郎博士」（沢田信敏、科学ペン二〇六、昭和十二年）、「科学者の横顔長与又郎博士」（科学ペン三〇五、昭和十三年）、「近世医傑伝 長与又郎」（藤田宗一、日本医事新報一五五九一―一五六一、昭和二十九年）、「東洋流の豪傑長与又郎博士の風貌」（中原和郎、心四〇四、昭和二十六年）、「長与又郎先生」（田宮猛雄、日本医事新報一二四四、昭和二十三年）などがある。

また長与自身が著わしたもので、専門分野である医学関係の著作、論文などは枚挙に遑がないが、それ以外では、「帝国大学新聞」昭和十三年七月四日号に掲載された「漂流船」と題する随筆、総長就任直後に「中央公論」昭和十三年二月号の、質問に答えるといった形式をとった「現代の学生を語る」などがあり、昭和十四年九月に急逝した次弟岩永裕吉の伝記・追悼集『岩永裕吉君』（岩永裕吉君伝記編纂委員会、昭和十六年）には「弟の想出 花を眺めて死んだ」を記している。これは幼時からの兄弟の交わりを淡々と描き、最後に岩永の死後一年四ヶ月でその後を追った裕吉の妻鈴子に言及して筆を止めている。自身が発行者となり、昭和十三年に編纂された『東京帝国大学病理学教室五十

年史」下巻には「恩師三浦守治先生の一面」という小文を載せている。この他、長与関係のものとしては、入学式、卒業式などにおける訓示といったものが、その時々「帝国大学新聞」に掲載されている。

### 三、本稿収録分の内容について

既述の如く、本稿収録分の時期、長与は東京帝国大学総長の職にあり、その関与する事柄は大学内外の多岐に亘っていた。以下これらのうちの主要なものについて概観してみよう。

昭和十二年七月七日に勃発した日中戦争以後、日本国内では次第に戦時色が濃くなり、従来から存在した大学に対する種々の攻撃も徐々に激しくなっていた。こうした中で起ったのが経済学部矢内原忠雄教授の辭職問題である。

矢内原に対しては養田胸喜、三井甲之等の発行する雑誌『原理日本』昭和十二年新年号紙上、養田が「矢内原忠雄氏の神話思想と時事批判との不実無根」と題した論文で激しく非難したが、このときは、いまだ重大問題化しなかった。しかし『中央公論』九月号に掲載された矢内原の「国家の理想」は大きな波紋を巻き起した。この論文は発売後削除処分とされ、再び『原理日本』紙上で取り上げられた。これが大学内で問題化するのが十一月に入ってからである。経済学部では従来より内部における対立が激しかったが、ここに至って十一月三日の明治節の際の明治神宮参拝問題をきっかけとして一挙にその対立が顕在化し、矢内原の論文も急速に大きな問題として取り上げられることとなった。

このような経済学部内の状況は当然のことながら総長長与にも通ずることとなり、十一月二十日以降継続的に日記に記載されている。従来この問題は矢内原自身の著作、矢内原の極く親しい同僚であった大内兵衛、またこの二人と対立した土方成美の著作等により、ある程度までその実態が明らかとなっているが、今回その仲裁役であり、双方から種々の情報が伝えられ、また文部省との交渉者であり、最終的に矢内原の処置を決定した長与の日記により、双方の主張、行動が明確となり、最高責任者長与の意志が明らかとなった。これにより

矢内原事件の実態が更に明瞭になることであろう。

十月十二日には大学制度審査委員会の第二回準備委員会が開催され、十二月二十一日に第一回委員会が開かれている。この委員会は、教学刷新評議会の建議により内閣に直属する諮問機関として設けられようとしていた教育審議会に、東京帝国大学としてどのように対応するか、即ち「大正七年ノ本学制度改革正委員会ニ倣ヒ大学ノ意見ヲ明確ニ致シ置ク為」(東大資料「大学制度臨時審査究批判ヲ行ヒ大学ノ意見ヲ明確ニ致シ置ク為」(東大資料「大学制度臨時審査委員会概要」)、昭和十二年六月二十九日の東京帝国大学評議会において長与総長の提案としてその設置が可決されたものである(なお東京帝国大学制度改革委員会については『東京帝国大学五十年史』、『東京大学史紀要』第二号所収館昭「帝国大学制度調査委員会に関する一考察」参照)。これに伴い七月九日に第一回準備委員会が開催されている。そして十月十二日の第二回準備委員会で「委員会ノ組織及審議範圍等ニ付協議シ、是ヲ組織案ヲ作成ス、同年十一月二日右原案ヲ評議会に附議シ更ニ之ヲ各学部教授会ニ諮リ同月三十日評議会ニ於テ右結果ノ報告アリテ本委員会成立」(前掲「大学制度臨時審査委員会概要」)という経過を辿り、前述の第一回委員会開催に至っている。この委員会はその後昭和十三年六月第七回委員会が開かれた後、荒木貞夫文相による大学改革問題等により中断し、十二月平賀譲新総長のもとで改めて再開執行され、十五年七月二日第二十六回委員会まで審議を重ね、「高等学校ニ関スル件」(学部ノ構成及追加)等三十八事項が決定された。しかし、これらの決定は総花式のものであり、その後の戦時体制の進行もあってほとんど実現していない。ただここでの審議課題はそれまでは異なり大学制度改革に止まらず、大学全般の問題に広がっていた。

この他、学内における各種の事項では、十月五日の評議会において日本思想史講座新設問題が議されている。これは文部省より天下り的に設置を求められた同講座の新設について、大学の自主性から見て問題があるとして抵抗してきたものであるが、ここで一心の決着を見ている。更に同じ十月五日教養委員会が開かれ、国民精神総動員の一環として実施する講演会について議している。こ

れ以外に在外研究員の減員問題、検見川運動場土地購入問題等が当時の学内に  
おける主要な事項であった。

長与は東京帝国大学総長として、学外の様々な事項にも関係している。日記  
ではまず十月上旬にスプランガー教授関係の記事がある。

スプランガーは昭和十一年十一月九日に来朝したベルリン大学教授であり、  
翌年十月十五日に帰国するまで約一年間日本各地で講演を行っている。彼は日  
独学術交流を兼ね日独文化協会の主事として来日したものであり、哲学及び教  
育学に造詣が深かった。その思想内容は「国家によつて始めて教育が生きた力  
となり教育によつて国家が道徳的にも醇化されると説き、人文主義と実学主義  
との教育史上の対立をここに揚せんと努み先般台頭した国家主義的教育学説、  
民族主義的教育学説を提唱し最近数年間に発表した教育論文は何れも国家本位  
の教育についての関心を以て貫かれてゐる」(「帝国大学新聞」昭和十一年十一  
月十六日号)とされていた。スプランガーの訪日により、日本政府のドイツ、  
そしてナチス政府の高等教育政策への関心の高まりを窺うことができる。

日中戦争に関連する事項としては、学内の応召者に対する措置の他、外務省  
が企画した中国に対する文化事業への協力がある。この計画が長与に報ぜられ  
る直前の十月八日、上海自然科学研究所長新城新蔵が長与を訪れ、事変下の上  
海の状態を知らせ、事変終了後の日中間の文化交流を協議している。この時期  
の外務省の対外文化事業は文化事業部の担当であったが、その前身である対支  
文化事務局は、大正十二年以後二十三年間に亘つて中国政府より受領する義  
和団事変賠償金および十五年間に亘つて受領する山東鉄道、山東省所在の公有  
財産に対する国庫証券等を積み立て、これを基金としてその利子収益をもって  
中国に対する文化事業を行う目的で設けられたものであり、上海自然科学研究  
所もその一環として設置されたものである。新城所長の来訪が、十月二十六日  
長与を訪れた外務省文化事業部第二課長宮崎申郎の伝えた対中国文化工作とも  
何らかの関連があると考えられる。

この文化工作は既に日本軍が進攻した「北支」に対する開発即日本化の基本  
条件を整えるためのものであり、陸軍、外務省を中心に策定されてきたもので

あった。その前提となる各種調査、更にはその実施に学界の協力が必要とされ  
ており、東京帝国大学へも当然の事ながらそれが要請されたのである。こうし  
て十一月十二日には医学部宮川米次教授を団長とする衛生調査班が出発し、十  
二月六日には法学部矢部貞治助教、安井郁助教、文学部海後宗臣助教が  
参加した文教政策等の視察団が渡支している。後者に関しては矢部が日記に詳  
細に記している(「矢部貞治『矢部貞治日記』昭和四十九年、読売新聞社)。

日中戦争に関連した記事としては、逐次戦況が記されており、十二月十六日  
には学内で南京陥落祝賀式が挙行されている。他方日中戦争に関連する米國、  
英國等海外からの報道も適宜記されており、同時に日独防共協定にイタリヤが  
参加するといった世界情勢にも長与は大きな関心を払っている。

この他長与は日本学術振興会の委員でもあり、結核予防、戦時下の科学振興  
等に尽力している。また教育審議会にも委員として出席し、それ以外の文部行  
政でも文部省と大学との接点として多くの活動をしている。更に曾て所長であ  
った伝染病研究所関係の記事も散見できる。その他長与自らの専門である医学  
関係の学会、更には他分野の学会にも参加している。

以上のように、この日記には長与の関心した様々な事項についてかなり詳細  
に記されており、東京帝国大学総長の職務内容を知ることができると同時に、  
東京帝国大学の最高責任者としてそのような事項にどのように対処したか窺い  
知ることができる。

末筆ながら本日記の公表に際して、これをお許し下さり種々便宜を計つて載  
いた清水文彦氏、長与道夫氏、長与健夫氏に深甚なる感謝の意を表す。

る宣伝戦は漸次効を奏し、近來ますます我國の立場を困難ならしめ歪曲せる報道逆宣伝の連発によつて世界の輿論は我に不利に進みつゝあり。邪に遂に正に勝だす。分る時には分るといふも宣伝戦に於ては明かに敗北なり。常に後手を打ち、正々堂々事を急速に世界に發表し真相を紹介するの方便に於て著しく不足を感じるは遺憾なり。

十月七日 木 晴

大学。

午後二時植物園緑会第十二回秋季大会に出席す。四時癌研。緑会学生千余名、教授、先輩多数出席。大きな顔振れ揃い流石に一万余名の会員を有する緑会なり。田中会長、余、穂積、末弘、芳沢、松本、吉田、加屋、美濃部、寛、永井等演壇に立ち真面目とWitsを取交ぜた話を為す。

此夜三菱銀行より太郎採用内定の報来る。

〔読売新聞昭和十二年十月五日社説「誤れる英国の指導的態度」の記事切抜貼付しあり。〕

十月八日 金 雨

大学。

午後三時、三好重道、瀬下清両氏を訪問、太郎採用の挨拶を為す。

夜、駿河台医師会館。

草間滋君一周忌追悼会、遺族全部出席。会衆百六十余名、川村発起人を代表して挨拶、北島と余と追悼の辭を述べ、六七氏のテブルス

ピーチあり。

上海自然科学研究所長新城新蔵博士二週の予定にて帰朝、来学。上海の状況を聞く。尚事変終了後日支間の學術文化提携の方法に就て協議す。

十月九日 土 晴

大学。

夕、東京会館、服部報公会第七回總會。

桜井理事長挨拶の後本年度報公賞贈与式。

感光色素の研究 理博 尾形輝太郎

理研 桜井季雄

尾形は化学的合成方面は「アミン」桜井はその効力と遮光ガラスの研究を担当、二十年を費せる共同研究にして學術及応用的に大に価値あるものなり。指導者は真島、柴田両博士なり、式後晚餐会、桜井、松浦、矢野、服部諸氏の夫々の立場にてテーブルスピーチを為す。

七時半、明治会館に赴き日独文化協会と國際文化協会共同主催のラングー教授講演会に出席す。演題は「日本及独乙の文化の将来」と題するものにして、日本に於ける最後の講演なり。此講演は教授が最も力を入れたるものにして其の説く所文化教育政治經濟思想に及び広く且深く満堂に溢れたる聴衆に多大の感激を与へたり。教授の日本に於て行ひたる講演八十余は近日岩波より出版する由、訳者は教授の愛弟子美術学校講師小塚新一郎なる若き学徒にして教授の講演には常に通訳の勞をとりたり。

〔支那こそ平和の攪乱者〕の新聞記事切抜貼付しあり。〕

十月十日 日 晴

終日静養、野球見物、庭園、盆栽手入れ等。

十月十一日 月 晴

大学。

四時半より理学部二号館講堂に於て上海自然科学研究所長新城博士の

「事変下の上海」と題する講演を聴く。

先づ上海自然科学研究所の創立、歴史、事業、方針、現況等より数年来の日支関係の漸次悪化せることより今回の事変に際して籠城を決意するまでの考慮苦心、上海に於ける事変勃発後の主なる出来事、第三艦隊旗艦出雲が黄浦口を動かぬことに就ての長谷川司令長官の決意、陸戦隊の苦闘、居留民の不安心理等を述べ将来の日支提携の方策は今日より攻究するの要あること、そしてそれは結局孔子の道を支那人が心から信奉するに非れば困難なること、誤れる指導精神によりて導かれる支那人は憐むべく我々は生を日本に受けたことの幸福をつくづく感謝するといふ意味の講話約一時間半、深き感銘を聴者（教授学生）に与へたり。散会后同博士、柴田、中村清二、寺沢寛一四氏同伴アラスカにて晚餐を共にし、対支問題に就き懇談す。支那国民には歴史的に共産思想の萌芽あり、既に春秋時代より所謂公羊学派なるものは共産思想を多分に包含する思想を主張し黄巾賊らに至つては其顯著なる实例なり。清朝末の康有為の著書に就て見るも康は多分に共産主義を抱懐し居たることを知る。

此日陸軍より報知あり。配属将校久保幸年大尉上海大挙行に於て頭部

貫通銃創を蒙り戦死せりと。直に同家（長崎村）弔電を發しまた竹内課長をして弔問せしむ。

世界の輿論は漸次日本に不利なる方向に進みつつあり。米國政府は従来日本の立場をよく理解し寧ろ日本に有利なる政策をとりしあるも國民の輿論悪化し来りたるに對し之を無視する能はず漸次之に動かされつゝある如し。

十月十二日 火 晴

午後一時、大学制度審査準備委員会を開く。

政府の教育審議會は何時設置せらるるや目下の時局にては多少遅延するを想像し得るも、大学としては徐々に大学制度に就て充分研究検討し、大学の態度を定め置くことは必要なり。而して之は政府及他大学の参考ともなるべし。

先づ本委員会の組織を如何にすべきやに就て諮り、三名説、準備委員会をそのまま委員会とする説などありしも、此委員会の議決を權威あらしむるため、また評議會、各学部教授会に對して充分の連絡了解を得るためにも委員の数は大正七年学制改革當時の例に倣い各学部五名宛とすることに決定す。

帝国学士院 四時半。

部会 池田菊苗會員死去、補欠三名予選は片山正夫、柴田確次、堀場の三氏と決定。

七時より Spangar 教授送別の宴を開き桜井院長の挨拶、Spr. 教授の謝辞あり。

十月十三日 水

九時山王ホテルに Spranger 夫妻を訪問、餞別として伊万里錦手中皿を贈る。

大学。事変応召者慰問に関する事務を遺憾なく取扱ふため庶務課に相談所を設け学生課、会計課と協力し各部局との連絡を緊密にして遺漏なきを期す。

此日大槻外科医学士荒城氏上海にて戦死の報に接す。佐藤清（大尉）博士召集せらる。野戦予備病院勤務の由。

十月十四日 木 晴

十時、岩田法律事務所加島<sup>[欠]</sup>弁護士の来学を求め内田、木村<sup>[欠]</sup>両課長佐藤農学部長と共に多年の懸案たる大学所有の巣鴨地所に関する処分方法を決定す。

癌研究所。

三時半外務大臣官邸、広田、安井両大臣の招待茶会。独逸政府の希望による（大使及キュンメル総長主として我方と交渉中）明年伯林に開催日本古美術展覧会に付朝野の協力を依頼す。出席者は委員となり大久保侯委員長となる。独乙側は第一級の優秀品の出陳を希望し居るも此点実行に際し幾多の困難を伴ふべし。

佐多博士来邸。

夜 Stoll に於て日独協会主催。

Hans Luther 米國駐劄大使、1924 ~ 1925、独逸宰相  
Kimmel 伯林博物館総長

大佐新任海軍武官

三氏歓迎晩餐会。Luther の卓上演説は素張らしきものなりき。

少尉森本<sup>[欠]</sup>、同宮下貞一郎、加納部隊少隊長として上海方面に出征中、宮下は九日、森本は十日戦死す。加納部隊は最難の方面に出動、加納聯隊長以下多数戦死者を出す。一樹の花一河の流れ、二週間宿泊して勇しく出征せる森本、宮下の死に対しては特に哀傷の感深し。

十月十五日

大学。

一時 Spranger 夫妻東京駅発帰國の途に上る。送る者百余名知識階級各方面に互る。文化交流の教授として此人程勤勉と誠意と深遠なる学徳と上品な人柄とを以て深い印象を与へた人は少いであろう。此人が帰國の後日独親善のため、また日本を世界に紹介する上に大きな力となることは疑ない。送る人も送られる人も温い心で袂別を惜んだ。

一時、独乙大使館参事官 Noth 邸の午餐会に出席、主賓は佐多、大久保利武、下郷、伝原、緒方、石橋両博士。

結核予防研究委員会開設。

三時—九時學術振興会、第二十二小委員会。

国民体力増進に関する委員会中、国家重要の研究事項として第八委員会に於て決定せる、「結核予防」に関する研究第一回會議を開く。林委員長本会設置の理由を述べ、主査として余に依頼することを希望し、決定の後會議に入る。



此日も主として各委員に從來研究し来りたる方面に関する一般学界の意向と自己の意見を順次陳述せしめ、先づ次回(十一月)に於ては Tuberkulin 反応検定に関する一切のことと BCG に関する意見を取纏むるに必要な資料の提供を求むることとして散会せり。会議正味約四時間なり。得る所少からず。此日会合の顔振。

戸田正三(京都) 寺師茂信(陸軍) 高杉新一郎(海軍) 小林六造(慶応) 以上第八委員会員。

熊谷岱蔵(仙台) 今村荒男(大阪) 栗山重信(東京) 緒方知三郎(東京) 佐藤秀三(東京) 有馬英次(札幌) 井上善十郎(札幌) 戸田忠雄(福岡) 千草峰蔵(奉天) 野津謙(東京) 高野六郎(東京)。

秩父宮雍仁親王同妃阿殿下英国皇帝戴冠式に陛下御名代として御渡英、欧州各地及カナダに於て極めて御多忙の数月を過ぎ、此日御無事御帰朝。

十月十六日 土 雨

朝 秩宮邸参候。  
大学。

午後二時半、上野精養軒 機械工学会創立四十年記念祝賀会に出席、祝辞を朗読す。

〔読売新聞昭和十二年十月十六日社説「重大なる法王庁の指令」の記事切抜貼付しあり〕

十月十七日 日 神嘗祭 雨

明治神宮に於ける国威宣揚、武運長久祈願の祭典に列席す。文彦、門司検疫所に於ける防疫事務を終へて帰来す。揮毫約二十。

十月十八日 月 雨

大学。

桂広太郎(公) 薬学副手より「公爵桂太郎伝」を寄贈せらる。之は脳研究報告に當つて桂公伝を通読する必要あり、過日井上三郎侯(故桂公次男)に余より依頼したるに對し、孫広太郎氏が持参せるもの也。此伝記大半を通読す。頗る感興を惹く。得る所多し。

午後一時豊明会に出席。

十月十九日 火

十月二十日 水

英国、米國を説き九國条約により國際會議をブラッセルに開き、之に米國の出席を勧誘することに成功し、此日東京駐劄ベルギー大使バツソソニエールより広田外相に對して日本に出席希望の正式招待を手交す。日本を侵略國としてあらゆる宣伝、暗中飛躍によりて不戰條約、九國條約を適用してその非を責むべしとの國際聯盟の決議に本づきて、発動することとなりたる此會議に我國がただその文書の表面的修飾につられて堂々出席、世界に對して我國の立場を弁明すべしとの論もあるも、事態の本質より考ふる時我國は断乎之を拒絶すべし。只その回答は正々堂々列國の誤解を解くと同時に此機會に於て更に從來の声

明より一層明確に我國の真意を世界に向つて発表すべきなり。

此夜國際文化振興会及國際学芸協力委員会の幹部、最近帰朝せる山田三良、姉崎正治、杉山直治郎三博士を芝浪花屋に招待、慰勞を兼ね諸種會議の経過、各國の文化提携に対する動向などを聞く。歓談九時に及ぶ。

十月二十一日 木 晴

午後小野塚氏の來室を求め、大学制度に關して大正七年改正當時の状況及昭和八年委員会に於て調査せる事項に付問題となり居ることに關して実情を聴き、將來改正を要する事項に就ても意見の交換を為す。高等學校の改革、停年制、大学院等に關する意見略一致す。

癌研。

石黒子爵見舞、吉本清太郎（昨日逝去）弔問。

トラホーム委員会の從來の成果を調査す。

十月二十二日 金 晴

十時内務省公衆衛生院委員会に出席の後、  
大学。

文相安井英二辭職、宗秩寮總裁木戸孝一<sup>〔孝〕</sup>代る。内閣補強のため、安井の自発的辭職なり。近衛内閣成立當時には現下の如き非常事變は予想されず、閣僚の詮考も當時の状況に對して時局收拾を目標とし各方面より少壯の智者を拔擢したるが今日の如き重大なる局面となりては力弱く、統制も意の如くならず木戸の入閣は首相の眞の相談相手として

また内閣改造補強の第一着手として時宜に適應せる更迭なり。安井の態度は賞すべし。

長与謙二招集命令に接し近く千葉戰車隊に入營することとなる。此夜、晚翠軒に一家親族約二十五名晚餐を共にし行を壯にす。

十月二十三日 土 晴

早朝原田熊雄來。木戸文相就任に付文部省の人事指導方針等に就て余の意見を木戸に伝へんことを依頼さる。原田は閣内重臣間に於て目下問題となりつゝある某重大事件の真相を語り、之に對して意見を交換す。

十月二十四日 日 晴

終日在宅読書、揮毫、静養。

昨日より開始せる上海總攻撃は重砲その他の攻撃威力を加へ作戰準備成りたる上に敢行せるものにして陸空海協力による激烈なる戦闘により敵は今朝に至り全線総退却を開始したり。大場鎮、江湾鎮の堅塁も遠からず陥落すべく、上海戰空前の激戦にしてその効果は甚大なるもの、遠からず南京上海の連絡を絶つに至るべく、北支の急速なる前進と相俟つて戦局は著しく有利に展開しつゝあり。

内蒙古は愈獨立を宣言す。

「綏遠獨立宣言」と題する記事切抜貼付しあり。

十月二十五日 月 晴

小野塚氏来室、原田会见希望の要件に付語る。

佐藤秀三来、北支衛生班派遣の件。

永井潜君来、今夜出発、台湾に一家と移住、医学部長として台北帝大のために尽すこととなり袂別の挨拶に来る。北京各大学の機構、主要職員等に就て同氏が三ヶ月間北京滞在中の視察を聞く、此夜東京駅にその出発を送る。

今朝謙二、召集に応じて千葉戦車隊に入営のため盛大なる歓送の下に元氣に出発したるに健康の理由(？)にて直に帰還を命ぜられたり。当人は大に悲観せる由。

十月二十六日 火 晴

外務省文化事業部第二課長宮崎申郎来。

北支に於ける医事衛生の応急手段及永久の対支文化工作としての施設を本格的に外務省に於て計画したき希望なり。その組織団長の人選、予算の概算等に就き立案を依頼さる。入沢博士外一阿氏と協議せんとす。右は外務省が国際聯盟の対支防疫事業遂行を決議せるに刺激せられて発案せるものなるが、事業そのものは、意義深きを以て援助を約す。

〔東京朝日新聞昭和十二年十月二十五日社説「上海敵軍の総崩れ」

「伊の防共協定参加説」の切抜貼付しあり。〕

午後文部省、學術振興會理事會。

此日の會議は本年度後期援助補助の決定。

特別委員會(探鉱研究)の新設。時局に対応して學術的立場から資源の開発、内地に於て未だ工業化せず輸入に依る重要軍需品の製作其他

に就ての建議案など重要な事項を議了したり。會議終了後余は第八

小委員會(トラコーマ)の過去三ヶ年の研究事業報告をなす。

大場鎮陥る。

〔九国条約會議不参加に關する帝國政府の声明〕の記事切抜貼し付あり。〕

十月二十七日 水

朝伏見宮邸弔問。

一時総長室に学部長の來集を求め(土方代大内、佐藤不参)文部省より内意を質し來りたる左の三件を協議す。

一、明年の在外研究員は全廃となるか、二名位認めらるか不定なるも文部大蔵と充分交渉する筈、但し明年度は平時と異り現下の時局に於て緊急止むを得ざるものみに限る大蔵省の方針なれば、各学部に於て人選専門学科に就て此意味に於て考慮し候補者を提出せられたきこと。

一、明治節大学に於ける式典挙行の後、職員学生神宮参拜に關する件(学生)。

一、大場鎮陥落に大学に於て何か祝意を表する催しをなすや否や(之は此度は行はず、適當の時機に於て考慮す)。

江湾鎮、真茹、閩北等支那の死守せる各地順次に我軍の有に期す。中支作戰の第一期は斯くして一段落を告げたるは慶すべし。併し今後尙二段三段の構あり、嘉老南翔の線は支那の所謂ヒンデンブルグ戦<sup>〔秘〕</sup>なり。之を突<sup>〔マ〕</sup>突<sup>〔マ〕</sup>突<sup>〔マ〕</sup>蘇州河を渡り北上するには更に多大の困難に遭遇すべし。

十月二十八日 木 晴

此日、北支總司令官寺内大将

中支司令官 松井大将

第三艦隊司令長官 長谷川中将

陸戰隊司令 大河内少将

宛左の電報を發す。

忠烈ナル皇國將兵ノ御奮闘に依り連勝連勝多大ノ戰果を収メ、大に

國威ヲ宣揚セラル洵ニ感激ニ堪ヘズ、茲ニ東京帝國大學職員學生一

同ヲ代表シ深堪ナル感謝ト敬意ヲ表ス

「上海・北支敵の死傷四十二万、我戦死僅かに九千」と題する記事切抜貼付しあり。」

十時半入沢、宮川兩博士と總長室に於て北支防疫事業に關して打合せ、宮川氏を團長として先づ第一班を来月初旬出發せしめ、実情視察現地に於て各方面と交渉の上更に本格的具體案を作成することとす。

午後金杉博士次男又夫の告別式に列す。

癌研。稲田、佐々木兩氏と共に各部局長を呼び、經費節約殊にレントゲン照射無料及試額の過多を戒む。

文部省教学局企画部長河原来、余に参与とならんことを申出づ。余は教学刷新評議會当時の所思は現在も変らず、教学局では大きな仕事は出来ぬと考へ居る故参与は受諾せずと答ふ。

「東京日日新聞昭和十二年十月二十八日社説「九国会議招請回答」の記事切抜貼付しあり。」

十月二十九日 金 晴

九時半豊島岡、伏見宮博義王第次王女<sup>〔次〕</sup>の御葬儀に列す。

大学。

夕、國際文化振興會に於ける鶴見祐輔氏の濠洲視察談を聞く。

配属將校横光秀男中佐死す。胆囊炎なり。没後大佐に昇進す。

夜、新文相木戸幸一氏を私邸に訪ひ、約一時半懇談す。

十月三十日 土 晴

十一時より各学部部長(工田中氏)、竹内、江口兩課長と明治節に學生団体参拜に就て協議す。田中氏一名反対他は有志団体参拜を許可することに賛成、多数決により決す。

上田万年博士葬儀(駕籠町自邸)に出席、弔辭朗誦す。

十月三十一日 日 晴

二時渋谷昌福寺、配属將校故横光大佐の告別式。

寺内、大河内等より感謝電報来る。

「東京朝日新聞昭和十二年十一月二日社説「平調を失へる英國」の記事切抜貼付しあり。」

十一月一日 月 晴

上海戦線引続き前進、南翔は遠からず陥落すべく、蘇州河の南岸に蜷集せる敵軍掃討のため敵前渡河を敢行す。

大本營設置の議あり。

九国条約国会議に英國はあらゆる策動を為し、米国の支援を得て事變解決案を求めんとす。独乙は共産ロシアの参加する會議には出席せずとして断はり、伊太利は日本の立場に同情し出席を諾す。

十一月二日 火 晴

評議會。

一、寄附金の件、医学部。三〇〇〇佐伯<sup>〔正志〕</sup>マスマ、病院図書購入費。

二、大学院学生処分。(工)支那人劉熾章、退学(万引)。

一、大学制度審査会創設ノ件。

準備委員会に於て決定せる仮案に付協議し之を各学部教授会に諮り、その意見を徴したる上更に評議會に於て決定することとす。

一、在外研究員に関する件

時局のため一時全部中止の噂もありたるが三名極秘に申出され度旨文部省より内報あり、政府では「直接軍事又は軍需に関係あるもの」に限るとの方針なるが大学としては大学の立場より研究上授業上急を要するものの派遣を希望するを以て、各学部長より一名宛の候補者に付説明を求め、余更に文部当局と打合せ三名を決定することとなる。

十一月三日 (水) 明治節 雨

九時大講堂に奉祝の式を挙ぐ。職員学生の出席多し。一度帰宅。正装、参内、記帳。

十一時、明治神宮参拜。

此日学生有志約四百七方学部長外教授教氏と大学より徒步行列にて代

々木に行進、大学指定の集合所修養園にて先着の職員学生と合流、参拝したり。

平漢線軍は正太線に沿ひ、山西軍は北方より進みて既に忻口鎮を占領す。山西の首府にて閻錫山の根拠たる太原の陥落近きにあるべし。

此日よりブラッセルに於て九ヶ国条約国会議開かる。日本の不参加は此會議の意義を最小のものとし、独乙も参加せず英米は今に至りて互にイニシアチブをとりしは我に非ずと言ひて、不成功に終ることの余りにも明白なる會議開催の責を他に嫁せんとし、伊太利は正々堂々日本の立場を弁護すべく、列国中には聯盟の決議が余りにも支那側の宣伝に乗せられたる一方的のものであることに氣付きたるものもあり、此會議は結局何事をも決定するを得ず、また日本を誹謗する声明などを出すことも出来ず、その収収<sup>〔イニ〕</sup>は頗る困難と見らる。

十一月四日 木 晴

大学、癌研。

ブラッセル會議、伊太利代表硬論を吐き日本を代弁す。英米仏ソ葡等の弁論は聯盟會議当時とは著しく穩かになつて来て居る。支那顧維鈞は依然各国に泣訴してゐる。ソ聯リトビノフは一般平和論でごまかし一語も日本の名を挙げず、英米も日本の感情を害せぬやうつとめてゐる。私は只米英に追隨するのみ。仏蘭西も弱くなつたものだ。スペイン問題其他万事英國の協力の上に依頼してゐる。単独では独乙には勿論伊太利に対しても齒がたたない。

此會議に現はれた大きな著明な現象は、上海戦線の現況が確實に日本

の勝利であることを列国が近頃に至つて漸く判明し、日支引分けとして取扱ふとした米國などもその認識不足を暴露したることとなり、日本が再招請などを問題とせず、飽くまで既定の方針で進むといふ強硬な意志の動かす可らざるを知り、他方日独伊の協約成らんとするは公然の秘密であり、此三国にスクラムを組まれては英も仏も手が出ない、ロシアも閉息(不明)してしまつた形である。之を一ヶ月前の状態と比較する時、その形勢転換の著しいことに驚く。結局正義と実力の勝利である。此会議を如何に收拾すべきかに各國は苦心して居る。結局米國にすがらんとして居るが、米國も容易に火中に粟を拾ふの愚をしない。時も時此日帝國は、

滿州國の治外法權撤廢の協約を發表した。

列國殊に支那にあて付けた皮肉である。

十一月五日 金 曇

夜南氏來。癌研の將來に付協議、島蘭記念資金三千円となり大学に寄附手續の打合。

大學。浜田京大総長來。京大肅正に引続き医学部不祥事件起り(松尾、岡林)其実状を語り將來の方針に付協議す。

十一月六日 土 雨

大學。

夜八時十五分臨時ニュース、外務省發表。

今朝十一時(日本時間七時)ローマに於て堀田大使、フォン・リッペ

ントロップ(駐英独大使、昨年日独協定當時の当局者)、チアノ外相三人の間に於て、日独伊三国の防共協定調印せられたる旨發表せらる。

此朝十一時樞密院に於て御諮詢の上決定せしなり。英國老い仏國は強國としての第一線より落後せんとし、露國は内部に著しき欠陥あり、依然宏大なるも粗末なる煉瓦建築の如く、一振崩壊の惧ありて当分は思ひ切つた事を仕出し兼ねる状況にあり。米國は世界一の富強を誇り居るも目下の状況に於ては万事引込思案にて、他國のおだてに乗つて渦亂の内に投ずるの愚を為すこともなかるべし。斯くして新鮮の氣、潑刺たる元氣を以て興隆の途にある日独伊の協力は二十世紀政治外交史上最顯著なる出来事として世界の太勢に大なる変更を將來すべし。

第○(四?)艦隊の掩護を受けて相当強力なる陸軍部隊は手際よく昨日杭州湾北岸に上陸し、今日は既に松江の近まで進みたりといふ。之は比較的無防備な上海の南側黃浦、南市を裏面より攻撃し、斯くして上海を包囲せんとするの企なるべく、作戰の妙を得たるものといふべし。列國も驚きたるべく支那の狼狽思ふべし。

〔東京朝日新聞昭和十二年十一月六日号外「日独伊協定けふ成立」、東京日日新聞昭和十二年十一月七日社説「防共陣營の強化」切抜貼付しあり。〕

十一月七日 日 快晴

田園調布に日独庭球試合を見る。世界 Ranking に於て No. 2 の Kramer と No. 3 の Henkel に対し中野、山岸の奮戦は目醒しく予期以上の出来にして、万余の觀衆を碎けしめたり。

我国庭球界に於て空前の盛観ならん。

6	—	3
7	—	5
6	—	3
2	—	6
0	—	6
Henkel		
Krammer		
6	—	2
6	—	4
1	—	6
3	—	6
6	—	4
山岸		

十一月八日 月 雨

朝、伊国大使、外務大臣、独乙大使を歴訪、防共協定成立の祝意を表す。大学。日独伊親善協会なるもの成立、九日各大学学生中より数名の代表者を出し外務省、独伊両大使館に赴き祝意を表したき故東大の参加を望む旨交渉あり。

左の理由により之謝絶す。

- 一、既に総長は大学を代表して祝意を表したり。
- 一、学業を休む学生が政治問題のために行列を為すことは面白からず。

一、大学以外の団体より種々の催につき大学の参加を希望せらるる場合之に参加したることなし。

一、大学学生の多数が自発的に愛国運動を起すやうな場合に於ても単に有志者のみの催は公認せず。各学部学友会協議の上学友会長の同意を得て本部に申出たる時始めて賛否を決する方針なり。

夜華族会館に於て、

啓明会創立二十年記念祝賀会に出席。

二十年前赤星鉄馬先代の美術品の売益により得たる金額中百万円を公

益事業に有効に使用する希望を以て之を無条件にて提供、一切を牧野

伯と平山成信男に依頼して出来たるものなり。學術の研究、發明の奨励を主目的として成立せる我国最初の財団なり。経営方針良きため学

界社界に多大の利益を与へたり。此夜会者百余名各方面の名士学者等参集。

晚餐後大久保理事長、木戸文相、桜井帝国学士院長、余、真野文二博士の順序にて卓上演説を行ひ九時散会す。余は学界の代表者の資格にて所見を述べ感謝の意を表す。

太原我軍の有に帰す。山西の首府、閻錫山二十年の根拠、保定と共に北支五省の軍事政治中心として中央軍の最も頼りとせし所。此地の陥落により黄河以北は全部我軍の支配下にある状態となる。

上海方面杭州湾の上陸と共に戦局大勢殆んど決す。九国条約會議の上

に及ぼす圧力は偉大なり。〔東京日日新聞昭和十二年十一月八日、十一月十日、東京朝日新聞昭和十二年十一月十日の事変関係記事切抜貼付しあり。〕

十一月九日 火 晴

大学。

午後二時半、額田晋来、蒲田帝国女子医専に赴き木村哲二と共に実験的結核治療の研究（チフス、□□□□、ワクチン）標本を見る。

夜宮川氏の招待常盤家。近く佐藤、小島阿氏と北支伝染病対策攻究の爲め出発に先ち外務省文化事業部岡田、林、宮崎三氏及最近帰朝の同仁会小野氏と会し、北支の現況を聞き対策に付協議す。

十一月十日 水 晴

皇室博物館復興成り、上野公園に俤観を加ふ。延坪六千二百坪、日本風を加味したる東洋建築の相当大規模なものなり。工費七百万。

此日落成記念式挙行せらる。

天皇陛下御即位記念奉祝の意味にて全国民の協力によりて出来せるもの、東洋一の博物館なり。今後の問題は高級貴重な内容の充実にあり。

三宅驥一君明日欧米出発に付暇乞挨拶の為来る。各大学旧知を歴訪し私設親善使節の積也。

十一月十一日 木 曇

農学部藤岡光長教授、林業試験場長教授兼任となりたるに付挨拶の為来る。

癌研究所に於て塩田、佐々木、稲田、南四氏と康楽病（註）の統制問題に付擬議す。稲田氏辭して専任院長として碓居〔竜太〕氏を置きては如何との提案に基くものなり。此日協議の結果は院長更迭は不可、院内各部署の庶務分担と協力の調和を計ることが先決問題にして之が為にも院内服務規定といふが如きものを確立し之を会の方針として此方針に従つて各員仕事に従事すること。次週更に会合各医局長に意見を開陳せしめその上に於て決定することとす。

夕、帝国学士院授賞者（医学部関係）候補に就て佐藤、荒木、三浦、宮入、森島、稲田諸氏と協議。岡山（医科大学）清水教授の Gallesäuren に関する研究に東宮記念賞を授くることに決す。

文、外、陸協議、希望

（大臣次官局長、承知）

政府 現状認識

一、北支に於ける文教政策に対する実地踏査の上に於ての考察、排日、抗日、毎日に代る方法。根本方針、三民主義に代る思想考察、民衆指導の方針。

一、文、外、陸協議の結果。矢部、安井郁、海後（文）（大臣次官承認希望）。

一、約四週間北支視察。

一、費用、一人約千円外務省支出（文化事業部）。外文陸内実は。

一、秘、新聞に発表せず（記事差止め）。支那及外国を刺激せしめぬ為め。北支の事は北支人がやるという表面上の立前（註）から。

一、時期、可及的早く。

参考

大学外 鹿子木貞信（九大） 宮島大八（〇〇〇〇）

作田莊一（京大）

相馬一郎（思想工作） 竹原正美

近藤督学官、現任書記官又は元在官 文部

矢野京大名誉教授

服部名誉教授意中の人

東方文化研究所関係

警保局書記官一名（加藤、水池の内）。



十一月十二日 金 晴

十一時田中、桑田両学部長、江口書記官と外務省文化事業局、文部省及陸軍省の三省協議の上決定せる北支文教視察員として大学より法学部は教授会に諮る必要あり、来週木曜決定の筈。北支文化工作に就て大学がその職とする所を以て政府に協力することは当然のことにして余曾て安井文相に此意を述べたることあり。法学部より矢部の如き人の出張視察は極めて有意義なるべし。

内務省に於て局長不在の爲め高野氏に面会。結核、癩病及癌の研究奨励に關して過日来関屋貞三郎氏と間に談合せる件に付同氏は既に近衛首相、馬場内相に意見を述べたるを以て余が一度内相と懇談すること必要となる。午後木村、竹内、江口三課長と文部省より大学に配布せらるる文化講義の謝金支出の方法、事務の所管等を確定す。

四時内務大臣官邸馬場内相と会谈。學術振會〔西〕結核予防研究委員会の使命と抱負を述べ、國家が右研究に對して相當の補助をなすことの必要を説く。馬場氏よく諒解し何等かの形式に於て余等の希望に充つるやう尽力を約す。余は差当り三ヶ年毎年二十万円の費用の必要なることを力説す。

五時半学士院。

第二部會員補欠選挙、片山正夫君当选。

晚餐會、桜井院長、姉崎、山田、桑木各會員帰朝親迎、四氏の視察談あり。

上海市我有に歸し南翔も陥落す。

十一月十三日 土 暖

此日朝五時航空研究所長距離飛行機藤田少佐縦の下に木更津を發し無着陸長距離飛行の途に就く。コースは木更津、太田、平塚を結ぶ三角形約二〇〇キロを一周として同一航路を繰返し飛行し一万二千キロ以上を翔破せんとするものなり。

十時学振波多野理事と会見。結核委員会の活動、昨日馬場氏との内話を実現するため来廿五日内務、文部、陸海軍、大学の主なる代表者を招待し懇談することとす。

午後三時半岩永来、自働車に同乗日光に向ふ。

岩永と日光に遊ぶ。

千住より旧奥〔マツ〕街道を疾走す。所々に新に開通せる直線道路あるも、多くは旧街道を現代的に改装せるため路傍の風光も面白く、立派な並木の遺存せる所も少からず。補装は約三分の一完成す。大利根には所謂東洋一と稱する鉄橋立派に出来、小山より北折して行くこと数里、杉並木の街道は既に日光の領内に入りたるを感ぜしむ。鹿沼、今市より日光までの道路は延長約九里、三百年の老杉鬱蒼として左右に整列して日尚暗し。力強き巨幹の根張の間を疾走する快心のドライブなり。パンクのため約三十分歩行の後、七時半金谷ホテルに入る。晚餐後雜談〔マツ〕約一時、早々就寢。

途中車内ラヂオにて航研機が航路四周の後、滑車車輪の故障の爲め木更津に着陸せるを聞く。

十一月十四日 月 晴

余が一家を携へて日光に遊びしは、十三年前のことなり。金谷ホテルは増築改造大に体裁を改めたり。

紅葉は既に過ぎたれども日光は矢張り国立公園中最も貴重なるものゝ一なり。道路は著しく良くなり車行自由なり。馬返よりケーブルカにて一、二〇〇米を昇り、更に空中ケーブルにて明智平に登る。眼界大北には中禅寺湖と華嚴滝を、東には男体山を中心とする諸山を望み、大谷川の溪流、般若方等の滝は遠く脚下にあり。新緑紅葉の季節の眺望は無類なるべし。

大学植物園を訪ふ。助手<sup>〔次〕</sup>君の案内にて園内を隈なく散策す。大正天皇が離宮より歩を運ばれ常に御休憩の場所と定められたる園内最形勝の地点には記念の石碑あり。金満測の奇観は今此園内のみより賞することを得るやうになれり。造庭は田村剛氏の案に成る。現在高山植物約五千種を適所に殖ゆ。総面積二万坪なり、園内起伏高低変化に富み、前に大谷川を隔てて<sup>〔次〕</sup>山を望む絶好の勝地なり。春は百花咲出でて殊に美しといふ。

東照宮は矢張り素張しいもの也。これ程精巧燦爛を極めたる造営物は世界に無かるべし。芸術上の価値に於て奈良の諸寺に及ばず、規模のより大なるは世界に於て少からず。併し日光には日光の特徴あり、他に比類なき立派な国宝なり。世界の名宝なり。徳川三百年の鎖国政策、徳川家本位の内政政略などが日本の世界的発展のために障害となつたとしても「日光」を後世に遺したことで無罪放免とするかなどと語る。

午餐後帰路に就くに先ちホテル主人の案内にて金谷ホテル Plant を観

る。約二万坪、此辺には珍らしき赤松の多き高台にして、水路を利用して養魚、発電その他さまざまの事業を営み、ホテル使用の牛乳、バター、蔬菜、花卉、魚などを自給し居れり。

帰路は速度早く粕壁より大宮に入り頼母木桂吉氏の盆栽園に立寄る。主人不在なりしも園丁の案内にて園内を巡覧す。頼母木氏は蝦夷松王として知らるる人、所蔵一万鉢を超ゆ。稀世の珍品十鉢程あり。蒐集育成に着手して以来僅に十年なりとは驚くべし。徹底的に事をやる人に見へたり。

岩永の希望にて癌研に立寄り、所内を一覧の後、京橋出井にて晚餐を共にし八時帰宅す。

此日自働車行百十哩程なるべし。よくも活動せるもの哉。帰宅後始めて陸軍の大部隊が一日揚子江上流白茆口の敵前上陸に成功し、直に支塘鎮を占領、崑山、常熟に向つて急進し、他方嘉定を一日にして陥れたる本部隊は東より崑山に進み、その陥落も近きにあるを知る。杭州湾の上陸後一週にして、此度は北方より敵の虚をつきて大部隊を上陸せしめたるは作戦の妙を得たるもの。斯くして上海戦の苦闘三ヶ月の後に至り、戦局は俄然進展し蔣の所謂ヒンデンブルグ線と称する嘉定、南翔、閘北の線の突破に次ぎ、崑山、嘉興も陥落日線の間迫り、蘇州に旭日旗の翻るも近きにあるべし。

〔十一月十五日付新聞切抜（上海付近地図）貼付しあり。〕

十一月十五日 月 暖

島蘭順雄氏来。三井家より島蘭家へ一万円慰勞金を贈られたるに付、

その一半を奨学費として寄附したき希望なり。過日余等同意發起にて集めたる三千円と共にウキタミン研究及研究奨学費とすることとす。

十一月十六日 火 晴

横須賀造船所に於ける軍艦飛竜進水式に列す。自働車にて往復。平賀工學部長同行。帰途は岡田忠彦氏も同乗。伏見博恭王殿下御名代として列席せらる。

山□・□□によりて横須賀造船所が設計せられてより六十数年なるべし。日本の製艦術の進歩驚くべし。単に造船工業の独立に止らず潜水艦、巡洋艦等新規軸も案出し世界最優の艦船の建造するに至りしは驚くべきことなり。

海軍が技術者を重用し研究を奨励したる結果にして飛行機も海軍は有力なるものを製作し、その能力は今回の事変に於て証明せられつゝあり。之も率先して大研究所を横須賀に施置したるに因る。

此日進水は一切予定の如く寸分の誤算なく無事終了せり。「飛竜」には、種々の新しい計画が試みられてあるといふ。噸数も速力も要目に記されたもの以上なるが如し。

〔航空母艦飛竜主要々目〕、昭和十二年十一月十六日東京朝日新聞切抜貼付しあり。〕

十一月十七日 水 晴

北支文教工作視察団派遣のこと、外、文、陸三省間に決定。大学より法二（矢部貞治政治学）、安井郁国際公法、文一、海後宗臣

長与文郎日記 昭和十二年十月—十二月

教育学の三氏参加を求め来る。文学部は異存なく、法学部も学部長は同意せしも矢部、安井両人は先輩の意向、同行者の顔振れ、責任の重大なること等より逡巡の形なりしが此日山川専門局長の来学を求め田中、江口両氏と共に懇談の結果、渡支を承諾することとなる。明日法学部教授会に報告の後決定する。

新城新蔵博士来、北支視察の状況を報告す。速水京城大学総長来、理工學部新設の計画を語る。夜右両氏とローマイエルに晚餐を共にし種々協議懇談す。

高柳図書館長来、各学部の図書購入、配布、支払統一に関し先般来図書館商議員の協議、各学部との交渉の顛末を報ず。各学部教室に於て多年慣例となり居ること多く、一時に全部の統制は困難なるも漸次に初志遂行の方針を定む。

十一月十八日 木 晴

大学。癌研。塩田、稲田、佐々木、南会合。病院改善問題を協議（第二回）す。後各医局長の意見を求む。

夜、学生会館新館に於ける茂木藏之助君長女の結婚披露宴に出席す。

十一月十九日 金

大蔵省明年度予算編纂方針極めて厳にして維持資金振換へによる検見川土地購入も不可能の形勢なり。之は重大事なれば穂積、内田、東、木村四氏と協議。先づ穂積教授主計局長に懇談することとなる。

竹村勘吾教授<sup>〔工學部〕</sup>帰朝、独伊英仏米の視察談を聞く。

細谷省吾米、陸軍より瓦斯瘴疽血清見学の為め四五名の軍医を伝研に派遣希望の内交渉あり。諾否如何にすべきや云々。右は宮川所長帰京後まで回答保留することとす。

田中法學部長米、教授会に於て矢部、安井両助教授北支行可決を報ず。

朝瀧沢、藤原兩学士米。学士院 Proceeding 及學術研究會議発行の各科 Journal 類多数(余の所蔵全部)を瘡研に寄贈す。

此日蘇州陥落。我軍一兵を損せず入城す。支那軍は各方面共に既に著しく戰意衰へ、我軍の果敢なる急追撃に算を辭して西方に遁走す。

南京政府遷都を決するの止むなきに至る。

十一月二十日 土 暖

大本營宮中に設けらる。

陸海軍出征各軍に勅語を賜はる。

東京医学会五十周年記念会(一号館)に出席、祝辭を述べ。桜井学士院長、石原學部長の祝辭、講演数々、余は早退す。

大講堂、教育に關する御沙汰書奉誦會。

明治三十七年七月十一日明治天皇東京帝大行幸、卒業式に際し、文部大臣久保田讓に對し特に左の御沙汰書を賜りたり。時恰も日露開戦後半歲當時世界最強の國と稱せられたロシアとの一騎打は假令三国干渉遼島半島還附以來臥薪嘗胆の十年を経て挙國一致海陸の武備を整へ士氣極めて旺盛なるものありしとはいへ勝敗の決は逆賭す可らず。政府

は万事を犠牲として只戰爭に勝つことを唯一の目標として邁進し隨て教育學術に關することは万事閑却せられんとし留學生の呼戻し、學者の就役、中学校以上の教員の一兵卒としての勤務等相次ぎ文部當局は勿論識者は衷心之を憂いつゝも時が時なれば只勢のまゝに任せありし時、

軍国多事ノ時ト雖モ教育ノコトハ忽セニス可ラズ其職ニ在ル者留意

セ

との御沙汰書を拝するに及んで政府も方針を変更し教育界學界は感激してます。その業に精進したり。此日の會合は帝國教育會、帝都教育會の主權にして來會者市内各學校教員二千余名、松平頼壽伯(帝都教育會會長)御沙汰書を奉誦、木戸文相及近衛首相(代)の祝辭ありて後當時の文部次官木場貞長氏老軀を壇上に運び當時の狀況を詳述し感動を與へたり。

木場氏の談に、久保田文相は教育制度改革を志し岡田(良平)に代りて木場を次官として立案に着手したる時、日露開戦となり一切の不急事業は無期延期となりて此改革も中止となりしこと。

當時六百余名の人々が官私各方面より海外に留學視察中なりしを、直に呼戻すこととなりしも、木場氏石本陸軍次官に再三懇談して中止となり、そのまま留學を継続せしことなどの話あり。

夜、星ヶ岡茶寮。東亜同文會理事會の新城博士招待懇談會に出席。岡部、林、津田その他、新城氏の北支文化工作案を中心として隔意なき意見を交換す。

〔東京朝日新聞昭和十二年十一月二十日社説「遷都と分裂の足掻き」

「記事切抜貼付しあり。」

十一月二十一日 日 曇

田中正年長春より上京、文彦と同道来邸。

十一月二十二日 月

大学。

午後、原田熊雄氏来、小野塚氏と鼎座、総長室に於て最近数ヶ月に亘りて某々方面に於て計画されたる某事件に就て真相を語り苦衷を披瀝す。

大内、舞出両評議員来、土方学部長辞意を漏し居るを以て留任勸説を依頼せらる。理由は大内とのイデオロギーの相違に基き大内の行動に倦厭たらざるものあるが為なる如し。事情は複雑なり。

十一月二十三日 新嘗祭 火 晴

午後萩窪入沢博士邸に赴く。近く所有地四千五百坪中の約三分の二を近衛首相に譲渡することとなり、その離別を兼ね、博士蒐蔵の書翰、1890年代頃始めて世に出た独逸を始め内外の繪葉書五千枚を展覧す。

楓、荻凹処の紅葉は耐なりき。近藤博士外三十名計り同席。鄭重なる晚餐の饗応、歓談教刻、九時帰宅す。

十一月二十四日 水 晴

菊池教学局長官来、余に新設の教学局参与たらんことを懇請せるも余

は前回同様の理由にて只考慮し置くべしと答ふ。

午後和田航研所長来、長距離機飛行の故障は脚の構造の不備に在ること判明、修理完了の後再挙を謀るといふ。来月中旬頃となるべし。土方経済学部長来、経友会委員中の神宮参拜に關して意見の相違ありたる点、大内評議員との意思の隔離、矢内原事件（中央公論九月号「国家の理想」なる同氏論文に基くもの）等々学部長として不本意の事件続出其職を辞したき希望にて此日教授会に提出する旨を述べ。余は同氏が現下の状況に於て学部長を辞することは内外両方面に對して極めて不穩当なり、辭職は思ひ止るやう説く。

夜、偕楽園。久富、奥山、野津三帝大新聞理事と会見、大学新聞の改善、時局に對應して大学新聞の取るべき指導方針などを協議す。矢内原問題は警保局、憲兵隊方面に於てますます重大視し居り、如何に發展すべきや予測し難き状況なるを聞く。

十一月二十五日 木 晴

朝、森莊三郎来、昨日の経済学部教授会に於て、土方学部長辞任申出で、之に對して某々教授より大内の辞任当然なるべき赤裸々の意見出でたること。

矢内原問題が議題となり議論紛々、結局両問題共来週の教授会に持越すこととなりし旨を語る。

余は経済学部教授会の自重を希望し、総長として適宜善処せんと答ふ。

一時、文部省、

學術振興會理事會。

夕、水交社。結核委員會中主なる人々の参集を求め、學術結核研究を徹底的に大規模に遂行するの決心を述べ、研究資金に就て各自の考慮を乞ふ。

数日前馬場内相より、先般の余との会見にて此事業の有益なることを十分に理解し早速藤原銀次郎氏に交渉、同氏が王子製紙記念事業として學術研究のため相当額(約二百万?)を提供するの意思あり、その一部を右結核研究費に充当することの了解を得、来月上旬余も藤原と会見の筈なる旨を追加す。

此日東京會館に於て、日独防共協定成立一周年記念〔念〕に兼ね日独伊三國協定の成立の祝賀會催さる。

閑院宮殿下台臨、各閣僚、独伊大使及在京人の多数官民各方面の人々總計一千名、此種の會合として空前の盛会なり。

安保大將發起人總代として開會の辭を述べ、伊独兩大使、近衛、広田、徳富諸氏の祝辭あり。

感激に充ちたる祝賀會なりき。

十一月二十六日 金 晴

物理学講座強化の第一着。

理研仁科博士を講師として物理学教室に迎へることとなる。物理教室強化の第一歩なり。今週より毎週二時間の講義を依頼す(近年東大物理学教室の内情に付、屢々耳にせることあり、柴田学部長に〔協力〕して仁科氏を迎へることとす)。

小野塚氏を研究室に訪ひ約一時間経済学部問題其他に付懇談。

午後一時半—五時半如水會館。

第二回學術結核予防會議を開く。新に原田軍医大佐を加ふ。此日は○○の効果に対する内外文献の綜合的報告、その使用条件、製法、分配方法等に就て主として今村、熊谷、戸田、寺崎、柳沢(佐藤代)其他より發言。○○を大規模に施行するに付、遺漏なき準備と方針を決す。東京會館「すきやき」に慰勞懇親會を開く。

十一月二十七日 土 晴

大学。大内、舞出、森三教授來、経済学部諸問題に付陳情す。意見を交換善処を約す。

十時半木戸文相私邸会見。

教学局参与問題。

官制上文部省参与の如きものは置く能はず。木戸は教学局参与制を利  
用し之を教学に關する大臣の方針決定の有力な諮詢機關となし、角張  
つた會議形式をとらず、自由に意見を交換することとし、議題も文  
部省の原案に就て形式的に協議するに止らず、各参与よりも何事に就  
ても問題を提出することを得るやうにしたし。要は識者の意見を此機  
関を通じて文部行政の上に反映せしむるやうにする意向なり云々。余  
は教學刷新評議会の建議即ち内閣直屬の臨時機關を設置し、教育一般  
の再検討を為すの積りなきやと質したるに、木戸は之を實行すること  
略決定、先刻枢府議長の同意をも得たり、大正六年寺内内閣當時の臨  
時教育會議の例に倣ひ、勅旨をも賜ひ有力なる機關設置を計画中、議

長としては荒井枢密院副議長内定(有馬大将説ありしも中止)、枢府より原、南二氏は議員となり、特別委員長を要する時は南の積なり、余にも其方面に於ても当然尽力を煩はしたき希望なり云々。

結局、文相の方針は余の抱き居るものと一致せるを以て大局より見て、参与たることを諾す。但し東京帝大総長名義でなく個人資格として引受ることを約す。

矢内原問題に就ても常に余と連絡をとり、当人が誠意を以て総長及教授会に陳謝の意を表したる時は将来を戒め円満に解決したし。内務省との交渉の結果、更に事件が深刻化し処分を必要とするが如き場合に於ても大学の自治を尊重し文部省が強圧的態度をとらぬやう希望し、明治三十八年山川総長の戸水問題に關しての辭職(久保田文相の取りし処置の不当なりしに基く)が全学の大問題となり結局久保田文相も職を辭すの止むを得ざるに至りしことの例を挙げ、文相の諒解を求む。

木戸「充分に領解せり」。

依て大学に帰り直に土方学部長を招き、來週水曜教授会に於て矢内原問題を正面より討議批判することは徒に紛糾を増すのみにして解決愈困難となり惹いては全大学の大问题となる惧濃厚なるを以て、矢内原が教授会及総長に対し陳謝の形式を整へたる時に於てはその上の処置は余と相談の上平和に解決するやう取計度旨を述べ。土方は大体之を領したるも二三の教授は頗る強硬意見を有するを以て或は貴意に添ひ難き場合もあらんと掛念するも尽力すべしといふ。

一時同族会に出席。帰宅。

三時大内、舞出両氏來、解決策を凝議す。両氏は余の之まで取りし方針に賛意を表し、矢内原には兩人にて余の満足するが如き陳謝の意を表する文書を提出せしめ得るを以て、その程度にて事務局円満解決の尽力を乞ふ。

経済学部の内紛はその由来する所遠く「level」の低き群雄鬪の狀態なり。将来も紛争絶へざるべし。何か一大転廻をなす組織の変更を實行し(例之現在の法、經二学部を、法、政経、商の三学部に変更するが如き)、人心を新にし大なる共同目標の下に小を棄て大に就くの氣分を創造するに非ずんば、根本的の改善は困難なるを感ず。

十一月二十八日 月 晴

朝俊一を招き過日加藤与三郎氏來談の件に基き将来の心掛けに就て訓戒す。

矢内原問題。

大内兵衛氏來、矢内原は余の好意を感謝し極めて敬虔なる態度にて謹慎の意を表し、自ら執筆せる陳謝文を示す。一句を削除し他は原文にて余は満足する旨を答ふ。適時本文を清書し余に提出し、同時に謝意を表したき希望なる由。

他方土方学部長に提出する文案も用意し置くべきも、之によつて学部長が完全に承諾し事務局を円満に導くや否や頗る掛念なり、余の斡旋尽力を切望す。余熟考善処を約す。

方針

土方が余と同方針となること大学全般のため必要なり。

教授会に於て陳謝の意を表せるを告げ、中央公論九月号の論文に対する批判を公開の席上に於て為すことは不可なり。

右は事局をます／＼紛糾せしめ、更に第二第三の犠牲者を出す惧あり。

一教授の進退は軽々にすべからず。教授会に於て而も当人の面前に於て批判し大勢が決定した場合その処分に対し総長が之を認可せざる時は如何なる事態を将来するかを考慮すべし。

大学の自肅自戒は必要なり。然れどもそれが外部からの圧力策謀に呼応するが如き形となることは、大学自治の破滅にして余の忍ぶ能はざる所なり。若し事態が斯かる方向に進展する時は全学の大問題となること必然なり。而てその全責任を負ふものは総長なり。

教授会を開催する以前に完全なる了解（総長と学部長と）を得て置くことが必要である。若しそれが出来ぬ場合はそれが可能となるまで教授会を開くことを延期する。

一切新聞に出ぬやうにする（声明書の如きものは宜しからず）。

事は学内の問題なり（内面的には外部と関係ありとするも）。

夕刻、田中耕太郎、高木八尺阿氏来、経済学部及大学将来の問題に付懇談す。大体余方針に賛成。出来得るならば経の教授会を延期するやう尽力せられたしといふ。

十一月二十九日 月 晴

高野岩三郎氏来談、経済学部の内情を語る。曰く、

本位田

極めて強硬、大内人物、戦後経済思想に対する深憂、大学の任務、自肅、改革、断行の要。

大内、舞出

矢内原支持、大内。

土方

矢内原言論の可否を問ふ。教授会内容絶対秘密を守る、夫以上に及ばず、大内問題を議す。先輩殊に〇〇〇の介入を排す。

三者同席

二日間教授会開会延期（土方明朝返答を約す）。

理由 余の意見決定、文部大臣と協議の必要あり、議会、問題となる件。

問題真相検討処分は協議すること。約束。

田辺

本位田と略同思想なるも大局を見てゐる。

夜、岩永、山川、穂積来邸、懇談。態度を決す。

石原氏より電話。土方水曜日教授会開会を通告せしよし、不都合なり。

経済学教授会に矢内原問題を討議せしむべきや否や。

土方強硬、教授会の意見は総長の参考となる。

大内、舞出、不可（紛糾大となる）。

処分方法。

甲の処分—影響 陳謝の形、経の大多数は承知せず。

乙 “ “ 自発的専決、自由派の反対。



大学の為め何れが良いかを考へ決定。

何れにしても犠牲者を出す。その場合余の決心。一人も犠牲者を出さぬやう努力する。

余は経済処分は同一に帰するとするも其手続の如何が大切なり。

事は経済学部に限局せず、大学全般の重大問題なり。

其処置は少くとも各学部長の諒解を得、妥当なるを要す。

意見対立せる時は総長の裁断に依る。

議論は天下に堂々発表しても俯仰天地に愧ぢざるものたるを要す。自派擁護のための策動は不可、議論は個人中心とせず、大学の為め大学の「自治」の立場よりせざる可らず。

国法に触れたるに非ず。大学が総て時流に投ずるやうになつては困る。愛国。軍閥一色にぬりつぶさるることは不可。

自由思想を抱く者は一人も大学教授たるを得ざる時は大学の学問の自由没落す。愛国、憂国の至情。

当人は言論の不穩当なりしことを陳謝し居る。此以上追及するは不可。

最初より採りし態度面白からず、いきなり教授会の問題とすることは。

学部長と総長と意見対立の場合には総長が裁決する。

矢内原は学者として立派なり。海外に於ける声価も高し。イデオロギ一の異なるものを排斥するは、偏狭なり。大学は多様に於ける統一が理想なり。

昨日の約束を無視して發送せしことは不都合なり。

長与又郎日記 昭和十二年十月—十二月

あれ程誠意を披瀝し大学全般の平和の上から懇々説得し、明日まで待つ、發送は控へると云ひしに拘らず、發送せしは不都合なり。二日延期するも事件は同様なり。

万一文相の意見、余と一致せざる時、尚充分に大学の立場より懇談し余の意見通りになるやう尽力すること。

木戸は総長を信頼し解決法を一任す。

過激な手段は取る可らず。摩擦相克を避け、改善を計画するにしても。斯る時こそ協同一致。天下の物笑。

十一月三十日 火 晴

評議会

寄附金の件 (法経) 新渡辺<sup>戸</sup>稲造奨学資

医 島菌順次郎 // 三件

大学院学生入学 医、特選給費生 医、文

大学制度審査委員会規定 正式決定。

来十一日までに各学部より委員各五名、幹事一名選出することとなる。

矢内原問題、来談者、

山崎覚治郎、高野岩三郎、土方、大内、舞出、東、其他数氏。

矢内原より総長宛陳謝文提出。

山川専門局長と電話。

此日文相官邸に於て、文相、伊東次官、菊池教学局長官、山川専門局長と会谈。文部省の方針を決することとなる。

私発表の言論に關し問題を惹起し閣下に御心配相掛け候事誠に恐縮に存候。私は平生国憲国法に対する服従を貴ぶことは勿論、我日本国を衷心熱愛する者に有之、大学令第一条に掲げらるる使命に留意して及ばず乍ら學問報国の道に精進し來れる積りに御座候。然る処思想表現の方法上不十分なるものありし為め自己の真意を伝ふる能はず、教授としての職責上妥当を欠く事なきやの点に付、閣下の御配慮を相煩はずに至り候事誠に不徳の致す処に有之、茲に謹みて遺憾の意を明仕候。

尚今後は十分注意仕る心底に有之候。

昭和十二年十一月三十日 矢内原忠雄<sup>㊦</sup>

総長 長与又郎閣下

矢内原辭職に決す。

四時半帰宅。五時山川氏来邸。

大臣官邸に於ける協議の結果、陳謝にては到底取まらず、中央公論以外の二文に国体精神と全く相容れぬ文言数ヶ所にあり、議會に於て質問の出たる場合到底弁明の道なく、大学としても事態の紛糾は免れざるべし、矢内原の辭職以外方法なしとのことなり。

その二文を見るに余としても到底許容出来ぬ文言あり。自発的に辭職せしむる外に道なしと決心し、山川氏に好意を謝し文相始め諸氏に謝意を伝ふ。

直に大内、舞出を招き、事情を語り、明日教授会開会以前に辭表を提出せしむることとし、同道して小野塚氏を訪問、同氏も余と全然同意

見なり。

同人辭職の学内外に於ける各方面の影響は相当うるさきものあらんも事故に至りては何等顧慮する所なく、矢内原問題を独立の問題として片付けることが目下の急務となつた。

帰宅せるは十時なり。

矢内原教授の言論が問題となつて居りましたことに就て私は先般來慎重に研究考慮中でありましたが本日矢内原教授は自発的に私の手許まで辭表を提出致しました私は熟考の上之を受理することと致しました。

昭和十二年十二月一日

〔東京帝国大学用紙にタイプ印刷されている。この発表談話の後に、談話の二通りの草稿が記されている。〕

十二月一日 水 晴

早朝大内より電話、昨夜深更矢内原と会見、同人は我々の好意を感謝し辭表を提出することを快諾せし由報じ来る。

十時半、矢内原、大兵、舞出と同道来室。辭表を提出す。之を受理し将来を戒め謹慎自愛するを勸む。

伊東文部次官に電話を以て事件の経過を述べ、矢内原辭表提出受理、問題解決に至りしこと大臣始め省首腦の配慮を謝す。

土方経済学部長を招き右の経緯を述べ、経済学部教授会の平和に終始すること希望す。

大学新聞野津、石上兩人を招き午後一時半新聞に発表の形式を協議

す。

江口書記官に辞表申請、退官に伴ふ待遇を決す。辞職の事情に基き官等位階の昇叙は之を遠慮し、矢内原の家計に顧み退官手当は最高のものでするの方針を定む。

斯くして辞職に伴ふ一切の事務を完了したるを以て正午より開催の予定なる George Parey の仏国に帰るを送る小集会を懷徳館に開き、一度帰宅の上、二時五十五分新橋發鎌倉に向ふ。連日の疲労を休めるためと、又一つは新聞記者の陸統訪問し来るを避けんがためなり。

一教授の進退は容易に決すべきに非ず。殊に矢内原の如き有能の学者を失ふことが大学のために如何に大なる損失であり、またその辞職を廻つて内部の事情を悉知せざる方面より大学の自治に対し相当の非難起り、学内外に於ても多少の精神的動揺あるは免れざるべし。併し此場合は到底救助の道なく、若之を敢てすれば其後に起る紛糾は計り知る可らず。余としては大学のため「泣いて馬糞を斬る」なり。同心の友人も亦止むを得ざることを充分に了解し、矢内原自身亦大学に多大の迷惑を掛けたることを悔み、余等の好意に対して万腔の謝意を表し進んで辞表を呈出せるものなり。

矢内原の辞職をして無意義に終らしめてはならない。土方に対しては此以上に進む可らずと固く言ふてある。大学の自治を守るためには全教授の協力を要す。そのためには総長は大所高所より見て絶対公平でなければならぬ。己れのイデオロギーに全致する者をかばい、之に反するものに酷であつてはならない。問題となる事物の本質を洞見しその対策を公平に批判し、熟慮に熟慮を重ね、一旦決定したる以上は

所信を断行しなければならぬ。世評の如何は問ふ所ではない。

矢内原の辞職に際しての発表

自分は本年日本国を衷心熱愛するもの者であるが、発表の言論に關し問題を惹起したことを遺憾に思ふ。自分として此以上在職するのは大学に対し御迷惑をかける所以なることを知つたので、本日総長に辞表を呈出した。本件に關して総長並に教授中数氏の最善の親切なる御配慮を蒙つたことを辱く思つてゐる。

新橋鎌倉間五十五分、停車場より人力車に塔じて海浜ホテル一号室に入る。人力に乗つたのは何年振のことか、恐らく十数年来始めてのことである。此一週は日夜忙殺思索に耽りあらゆる方面に考慮を払ひ、総長就任以来最も頭を悩ました事件の一つである。停車場で人力を見付けて自働車に依らず、殊更之に乗つたのは心機一転の法と思ひ付いたからである。乗心地は悪くはないが、日々自働車で疾走してゐる身にとつては余りにも緩慢なのに驚いた。徒歩しても之よりは早からう。併し乗つて居る内にだん／＼に馴れて来る。自働車では通れぬ細い路を絶体安全に通ることが出来る。三角形の一辺の近道を走る。便利なものだと思ふ。自働車では目に留らないものが一つ一つよく目に付く。旧知の人々の門札などをゆる／＼眺め懐旧の情を新にしながらホテルに入る。忙しい人間は時々人力車に乗つて気分を落付けるのも心身静養の一法だなど、一大発見をしたやうな心持となる。

入湯、晚餐後近郊海浜を散歩し、早々寝に就く。

十二月二日 木 晴

七時起床。新聞を通覧。海岸散歩約一時間、風無く快晴、気分爽快。半日一夜の静養効果百%なり。

八幡社内の国宝館を一覧、十時五十分の汽車にて帰京、直に登学す。大学は職員も学生も皆静穏である。矢内原は此日最後の講義をなせし由。

土方来、昨日教授会は比較的無事に終了せしも学部長の辞職を5:6にて認むることとなり、妙ないきさつとなつた。

土方も大内もそのまま(少くとも当分は)とするやう取計ふべしと希望す。

夜、岩永、善郎来。

〔東京朝日新聞昭和十二年十二月二日記事「時局と帝国大学」の切抜貼付しあり。〕

十二月三日 金 晴

山川専門局長来、近く内閣に新設せらるる教育審議会(先日木戸の話したるも)の委員たらんことを望む。之を諾す。委員は各方面より約六十名なり、会長は荒井枢密院副議長なり。

来訪者多し。

長谷部言人氏来、明年より人類学講座担任として東北帝大より東大に転任決定の挨拶。

十二月四日 土 晴

大内教授来、去水曜日経済学部教授会の経緯の詳細を聞く。同学部の前途極めて多難なるを想はしむ。

王子製紙社長藤原銀次郎氏理工関係学部是相当多額の寄附を為すの意志あり。曩に京阪の大学を視察、数日来より東大視察、本日は二回目なり。懷徳館に於て午餐を共にす。教授数氏、藤原氏同伴、研究所長外一名同席。

一時半小金井良精先生銅像除幕式。

医学部二号館大講堂。

司会 三浦、除幕 令孫、開会の辞 井上通夫。

挨拶祝辞 総長、学部長、入沢、長谷部、足立文太郎。

主賓答辞。

余は三時早退、本部に於て大学新聞掲載の原稿を見る。此夜小金井博士の招待会(工業倶楽部)に出席す。入沢、足立外約三十名。八十歳の先生は老夫人と共に主人として懇ろに歓待す。先生の招宴は珍らしきことなり。足立文太郎氏の Table Speech は天下一品の称に背かず妙絶。

十二月五日 日 晴

上海戦況急激に進展、鎮江、句容、溧水を結ぶ所謂セクト線も大なる抵抗を見ずして一兩日前攻略を了し、今や全部南京に向つて前進、之を包囲せんとし、各部隊は先登を競ふ。首都南京は風前の灯なり。南京既に首府たるの資格なり政府各部は漢口、重慶、長沙等に分散し、蔣介石は宋美齡及幕下の二、三子と南京に止まり頑強なる最後の

抵抗を試んとするも、志気阻喪せる支那軍は最早大した抵抗を為し得ざるべし。

午前中揮毫十数枚。

午後外苑競技場に Rugby 早明争覇戦を観る。14:11の接戦にて早大勝つ。観衆三万。

十二月六日 月 晴

昨日来寒気頓に加はる。各地に結氷を見る。

来訪者、久富、野津（大学新聞経営、理事に関する件）。

舞出、経済学部の将来に関して懇談。明後水曜の教授会に於て誠意を以て正論を述ぶるやう勸説す。

経済学部の自治の能否は全学部の関心事なり。表面冷静を保つも各学部の主腦者は経済学部の動向に多大の関心を有ち、その結果如何によつては大学全体の問題となるべし。経の諸教授は小異を捨て大同に就き、大局より見て互譲の態度を以て相對するに非れば重大なる局面を展開すべきを以て、長老諸教授の善処を望む。

五時半高輪森村邸同族会。終つて錦水に晚餐を共にす。  
南京陥落日隄の間に迫るの号外出づ。

十二月七日 火 晴

土方経済学部長、上野同教授に個々に昨日舞出教授に話した通りのことを述べ、明日教授会の平穩に経過せんことを希望す。

一時学部長会議、三課長同席。

建国祭に際し大学学生の代々木練兵場に集合することに、大学の参加することに付協議す。

大体従来通り学生中の有志の参加することとし之を大学に於て認め、配属將校に任せず、学生課員が之に共同することとす。

南京陥落の場合、大学は独自の立場にて祝賀式を挙ぐることを決す。

三時陸軍少將藤井<sup>[次]</sup>氏査閲官として長島大佐同伴来学。秋山大佐、

藤井中佐の報告、演習状況視察の後講評。夜は以上四氏に学部長（田中、平賀、柴田、土方）、木村、竹内、江口、大室、吉田諸氏と懷徳館に於て晚餐を共にし余及藤井挨拶、食後懇談、八時半散会。

十二月八日 水 晴

南京を包圍せる我軍は支那側に対して降伏を勧む。首都を灰燼に帰し敵兵塵殺の惨を免らしめんとすの武士の情なり。

祝賀会挙式の方法を決するため内田、江口、竹内、木村四課長の外桑田、塩谷両教授の来室を求む。熟議の結果、日露戦争旅順陥落当時三十八年一月二十日山川総長の時挙行せし挙式の次第に大体同様の方法を採ることとす。

経済学部教授会に於て、土方は学部長に再選し大内評議員の問題を議することは妥當ならずとの提案6:5にて通過し、此問題は一先ず小康を得た形となる。此会議に於て、上野、舞出、河合、森四教授の言論は本位田、田辺の暴論を制し、結局一教授（馬場）の大乗的賛成にて可否が決せられたりといふ。

四時十五時半、東亜同文会理事会。上海同文書院兵燹に罹り現在長崎

高商跡の仮校舎に於て授業中なるも、期限は来年三月迄なり。至急上海又は北京に於て適當なる校舎を見出すの必要あり。清華学堂もその一候補地として挙らる。此外同文会が此際従來の商業教育より更に、進んで広く文化的の活動を開始せんとするの希望理事者中にあるも、根柢薄弱、研究も足らず意見の一致を見ること難く、來十三日再び会合して協議することとなる。

此夜懷德館に於て滿洲国留学生（段栢林、鄒文、莫東寅、孫成寶、張憲武、白寶棟）及滿洲国大使館員原參事官外二名、文化事業部岡田、林、宮崎等を招待、大学側より法理文学部長其他出席す。

席上余は学生の心得として専門の学を勉強する外、在京中日本の歴史を読み如何にして今日の日本が生れたるかを深く考へ、帰国の上大抱負を以て努力すべしと述べ。岡田、原、段等の挨拶あり。九時散會。

十二月九日 木 晴

十時文部大會議室。

東亜文化振興協議会、第三日に出席す。

北京より來京せる支那教育界の代表者六名、日本側より約三十名委員として出席の此委員会は、

(一) 日支提携の基礎をなすべき文教の方針如何

イ、日支兩國國民の親善を徹底せしむべき精神的指導原理

ロ、東亜の平和を確立すべき指導原理

(二) 文教振興に関する實際問題

イ、教科書の改訂及編纂

ロ、文教指導者の養成

ハ、東洋精神文化の研究啓發宣布

ニ、日支兩國語の普及方法

を協議する委員会なり。目下の時局に於て日本に來るは余程の決心を要す（喜多少將の斡旋なりと）。

相互に胸襟を披瀝して隔意なき意見を率直に陳述し、將來の参考となす目的なり。

此日始めて出席。支那側は宋氏、日本側は<sup>（不明）</sup>津外四五氏の意見希望開陳あり。有益なる會合なり。

大学、南京陥落祝賀会の次第を決定す。

塩谷教授より陸海軍に対する感謝文の草稿來る。

癌研究会。

四時半—七時、工業俱樂部、癌研理事会。

塩原、佐々木、稻田、塩田、今村、岩瀬、山本、南、木村、報告、協議。

十二月十日 金 晴

北支より來京中の支那人五名及關係者十數名を懷德館に招待、茶會を催す。席上塩谷博士作詩を支那音にて吟ず。

一時—二時、学部長會議、南京陥落祝賀式次第を決定す。

十二月十一日 土 晴

緒方氏來、病理教室病人続出し教室の陣容強化の必要あり。助教授講

師採用人選の相談。

工学部西松唯一教授、浜田助教授、井坂助教授来、明日上海南京方面に視察見学の為出發す。爆彈のコンクリートに対する威力その他の調査なり。

風邪の気味、気分あしく十一時半帰宅、臥床。

十二月十二日 日 晴

終日静養、読書、江口氏の原稿に基き式辭の執筆に着手す。今里政実

(文子孫、本年陸士予科入学)来る。

教育審議会委員の辞令来る。委員は六十五名、此外に臨時委員数名あり。議長は荒井枢府副議長なり。官制の發布は一昨夜官報を以てせられ、特に「上諭」を賜りたるは政府が此審議会に教育改善の<sup>「功」</sup>実功を期待せるものにして、大正六年寺内内閣当時の臨時教育会議の例に倣ひたるものなり。

偶大学に於ても大学制度調査会を設け、各学部より精選せられたる三十五名の委員によつて真面目に審議を進めんとす。奇遇といふべし。

宮川伝研所長北支視察より帰る。

〔帝国大学新聞「教育審議会誕生」記事、昭和十二年十二月十三日「大学制度審査委員会誕生」記事切抜貼付しあり。〕

十二月十三日 月 晴

感冒未だ洗然せず、一日静養することとす。来訪者 田宮、立吉、江口等。

式辭推敲數度、略完成す。

南京攻囲第四日にして各門より我軍は市内に侵入、此日市の大部分を占領す。今夜或は遅くも明日中には完全に首都陥落の報に接すべし。敵の死者は莫大なる數に上る。我にも相当の戦死傷者ある如し。

伊太利聯盟を脱退す。エチオピア事件以来の懸案にして当然のことなり。日独伊去り、米は始より加入せず、聯盟は愈影の薄い存在となつた。もと／＼こんなもので世界の政局の安定を計らうとすることが間違つてゐるのである。自分は最初から之は歐洲の小國間の紛争を抑へるには役立つかも知れないが、大國の動きを世界の事情に通じない群小國の寄合所帯で無責任に協議した所で何も出来るものではないと云ふてゐた。そして最初に脱退したの日本〔は〕であり、独逸は始め除外され、1926に加入を許されたが曩に脱退し、久しく加入を肯じなかつたロシアは仏國に勧められて数年前に入つたが、常に暴論を吐き続けてゐる。伊太利の脱退はエチオピア問題、スペイン問題があつたやうな始末となつて聯盟で論じられてゐる以上、脱退は当然である。聯盟の牛耳を取り、群小諸國を引廻して自國の利益を謀るに汲々としてゐた英仏も、今後は聯盟の力を利用して國際關係を自己に有利にリードすることとはまず／＼見込が少くなつた。将来聯盟は解散の運命にあるものと思はれる。そして何か異つた形態で世界の平和維持に資する機關が諸強國の間で協議せらるる時が来るであらうと思ふ。

十二月十四日 火 暖

昨夜十一時二十分南京陥落の大本營陸軍部発表公表せらる。

大学。

宮川伝研所長来、北支視察談及寺内、湯其他日支の要人と会談の模様を聴く。事変後の收拾は容易に非ざるの感も一層深くす。湯爾和氏の所見は流石に支那及日本を完全に理解する人として、またあらゆる経験を積みたる苦勞人の言として傾聴すべき所多し。

大体に於て余の抱懐せる私案と一致す。

馬場内相病氣のため辞職し末次海軍大将之に代る。

内閣強化せられ、政府の事局対処方針に新なる展開を見ることあるべし。宣戦布告も或は実現すべし。

夜、学士会館に運動会先輩東、惟松、永井、豊田、久富等と会食。

「南京城完全占領」と題する新聞記事、東京朝日新聞昭和十二年十二月九日社説「南京陥落と政治工作」の記事切抜貼付しあり。」

十二月十五日 水 晴

大学。

参内、天機奉伺（南京祝勝）、大本營幕僚長閑院院<sup>〔宮〕</sup>、伏見宮両家伺候の後帰宅。

数日來の風邪未洗然せず、明日の式典に備へるため静養。

夜、善郎来。

揚子江南京附近に於て海軍機は米國砲艦一隻、石油輸送船三隻を誤つて撃沈、陸軍も重砲を以て英艦を砲撃せる事件は米英兩國を甚しく憤慨せしめ、如何なる事態にまで發展するやと懸念せられたるが、日本

政府及海軍が即刻誠意を以て陳謝し、責任者の処罰、充分なる賠償及今後の嚴重なる取締を確約するに及んで、米國の輿論も政府も稍静まりし様子なるも、英國は中々六ヶ敷き模様なり。

人民戦線派と称せらるゝ準左翼分子四百余名一時に検挙せらる。末次内相の断行なり。大森、山川等何れも其内にあり、此度は「Journalist」団を検挙せるもの。次には一定数の教授に及ぶべし。

「中華民國臨時政府宣言全文」の新聞記事切抜貼付しあり。」

十二月十六日 木 晴

南京陥落祝賀式を挙行す。

運動場北側に式壇を設け職員学生五、六千名定位置に整列、九時四十分長井助教授指揮帝大ブラスバンドにより君ヶ代斉唱二回、余の式辭、天皇陛下万歳三唱、帝國陸海軍万歳三唱にて式を終り、大部分の参列者は学部順に進行を起し、徒歩にて宮城二重橋前に奉拝。次で靖國神社に参拝。其所にて解散す。

余は式後江口書記官帯同、陸軍大臣官邸に於て杉山陸相に、海軍省大臣室に於て山本次官（米内海相は参内）に夫々帝國大学より陸海軍への感謝状を手交、感謝の辭を述べ暫時戦局談をなして帰宅す。

今裕氏上京、来邸。

連日の疲勞を医するため桃子、明彦同伴、自働車にて二時半出發、鎌倉海浜院<sup>〔海〕</sup>に入る。

此日阪本鈴之助翁一周忌相当に付、出發前飯倉の邸に赴き焼香す。高



輪の会合は謝絶す。

北支に新政権樹立せらる。臨時政府にして湯爾和氏は其主腦者なり。

〔「俱に時艱に当れ（総長式辞）」と題する新聞記事切抜貼付しあり。〕

十二月十七日 金 晴

昨夜安眠を得ず、ホテルは事変のため極めて閑散、食事もサービスも頗る感服せず。九時頃約一時間海岸を散歩し、十一時ホテル発、八幡宮に参詣、帰途横浜 New Grand にて午餐をとり、三時帰宅す。疲労太し。午睡一時間半。夜、晚翠軒伝研病理同兼会に出席す。三田村、田宮外二十数氏出席。

十二月十八日 土 晴

大学。  
夜、錦水。上京中の今博士の総長新任を祝するため緒方、三田村両氏を交へて懇談す。

十二月十九日 日 晴 夕刻より雨

終日在宅。

夜、錦水。癌研職員招待会。今年より塩田副会頭、福田、南、佐々木諸氏と共に主人側に加はる。此日佐々木氏風邪にて欠席。

十二月二十日 月 晴

大学。

長与又郎日記 昭和十二年十月—十二月

十一時築地に新設せる京橋区衛生実施地区保健館の開館式に列す。口財団の寄附によりて来夏竣工の衛生院に附随して設立せられたるものなり。

我国最初の試みなり。工費二十万余。

学術振興会理事会。

議事終了後、井上禧之助（第六常置委員長）の支那石炭鉦及鉦鉦の分布に関する講話あり。

十二月二十一日 火 晴

大学制度審査委員会第一回総会、午後一時。

委員三十五名幹事七名、助手書記等全員出席。

先づ余は、

我国高等教育の制度に関する歴史的発展、時々の改正、各種審議会、委員会の類の行ひたる実績を述べ、東大としては、大正七年及昭和八年の委員会を開き夫々当時の時勢に順応して大学組織制度等の改変、または、諸種の諸問題に対する大学の意見を纏め置きて問題発生の場合に適当対処する準備を為したることを詳述し、今回の委員会は、大正七年の委員会に相当する重要なものにして、他方政府に於て近く教育審議会が設けられ、教育全般に亘りその制度及内容を検討することとなり、大学教育に關しても当然、論議せらるることとなるを以て、本会の設置は一層の意義を加へたるを以て各委員の尽力を乞ふ旨を述べ、委員会設立の手續を慎重にしたること、会議の形式を自由討議にすること、秘密

会とすること等を述べて開会の辞とせり。

柴田、平賀、石原、田中、末弘、穂積、佐藤、丹羽、橋田、河合等より発言あり。明春一月二十五日(火)より二回位総会を開き大学教育、研究、高等学校問題等に付き一般的に各委員の意見開陳を求め、其上にて問題を選び、特別委員に附して審議を進める方針とす。三時閉会。

此夜、学士会館に於て年末慰勞会を開く。

柴田氏を除く各部長の外、本年度欧米に出張せる、杉山、田中、竹村、上床四教授を招待、晚餐を共にし、余の挨拶、平賀工學部長の謝辞ありて、海外出張四氏の視察談を聴き九時散会す。

〔大学制度審査委員会座席表貼付しあり。〕

十二月二十二日 水 晴

午後一—三時、暖房委員会。

四時、工業倶楽部に於ける日本体育協会の会長下村宏博士推戴祝賀会に出席す。

平沼副会長開会の辞。来賓として長与、井上匡四郎、伊沢喜多男、有馬良橋、松永市会議長、永井松三、第十二回オリンピック委員長順次祝辞を述べ、下村氏の答辞にて式を終る。岸会長歿後始めて会長らしき会長の決定を見、体協も漸く蘇生すべし。

労農派の赤色群四百余名検挙せらる。末次内相の強力政治の発露なり。

十二月二十三日 木 晴

教育審議会開かる、十時半、総理大臣官邸。

荒総裁、近衛総理(木戸代読)、木戸文相挨拶。

伊藤次官の諮問内容の説明あり。開議に入り二三の発言ありて閉会。首相の午餐会に出席。

馬場鏖一告別式。本願寺。

大学。

独乙〔矢〕伯夫妻(大使夫人親戚)来学。

夕刻、癌研。

十二月二十四日 金 雨

大学。

十一時半文相官邸。

教学局参与会議、第一回。

木戸文相の挨拶、長官菊池(代理、病氣)の主旨説明あり。文相は此の會議を文部省参与會議の意味にてやつて行きたいと希望する旨を述べ、月一回位会合懇談的に問題を討議し、また時には會議式に諮ることもある旨を述べ。田所、松浦より質問あり。余は運用の点に付、文相に駄目を押しして置きたり。午餐後解散。

十二月二十五日 土 晴

大正天皇祭。

九時半宮中参内、賢所に於ける御儀に参列す。

十二月二十六日 日 晴

終日在宅、明年御講書始原稿の推敲。読書。

米艦ペネー号撃沈事件は著しく米国政府及国民の感情を害したるも、当局の誠意ある措置と責任者の処罰、賠償及将来嚴重の注意を約することにより米国政府も諒解し、此日を以て右問題は無事落着くこととなる。慶すべし。

数日前中支に於て杭州を殆んど無抵抗に占領せる我軍は、此日朝山東首都済南を攻略す。二十三日夜大黄河の敵前上陸を敢行し、僅に二日にして此古都に入る。斯くして支那大陸東半の大都市は殆ど全部我軍の手に歸したり。但し済南商阜地にありし我領事館、同仁会病院を始め、邦人の所有財産は大部分焼失したり。退却に際し火を放つは彼の常習なり。

十二月二十七日 月

大学。

正午、東京会館。伊国大使アウリツチの石本博士夫妻交換教授として渡伊を送る会に出席す。田中館老博士の英語挨拶は上出来なり。

午後二時半、佐藤、和田、内田、木村四氏と総長室に於て文部大蔵両省協議の上決定せる駒場土地分割の最後案に就て協議す。之を認めることとなり、茲に大正十二年以来の懸案は解決したり。後は、大学に与へられたる地積の分配及大学のために留保となつて居る残余の地域の購入方法を講ずることが問題なるも、之は早晚解決する見込充分なり。

此夜岩永、善郎、沢子、俊一來邸。懇談の上俊一の結婚問題及三共に辞表提出の事を決す。

十二月二十八日 火 晴

大学。御用仕舞。正午癌研に赴く。

武藤幸治台湾より上京、東京へ助教として転任問題に付意見を述べ。此朝両緒方と共に新築略成れる医学部二号館を見る。図書室、解剖室

その他総て従来に比し全然面目を改め、現代的教室として立派なものとなれり。殊に標本室は陳列完成の上は誇るべきものとならん。

二時—三時、大久保清水家訪問、一郎老人と久し振にて約四十分懇談す。老は我国結核問題を重視し種々希望を述べたり。

此夜錦水。東亞同文会理事会。同人等と支那に就て語る。

小島、佐藤両博士北支より帰京挨拶のため来学せるも、不在にて面会せず。

塩原又策、同楨三二氏来る。俊一を現職ベークライト会社より陸王内燃機会社へ転動に決せる旨を報ず。好意謝するに余あり。

十二月二十九日 水 晴

此日より出勤せず、終日在宅。整理、読書。

十二月三十日 木

十二月三十一日 金

〔別紙〕

北京。

新城博士案、有力なる高級の委員会を設け、文化工作全般の方針を定む。

大学、研究所を早く開設すること。

既存大学中差当り、

北平大学とを合併し、綜合大学を作る、程度は我國の単科大学又は高専程度。日支協同。

医、農、工、理等を主とし、文、商、法は漸次拡大するとしても差当り小規模。

研究所。清華大学（現在牟田口部隊占拠五十万坪）の一部を使用すれば研究所に利用するか。

伝染病、地質研究所等（北京大学内）。その他必要に応じて造る。

但し、之は米國が団匪賠償金にて建て國民政府に与へた歴史あり、感情上面白からざりし。

（てるぬま やすたか 百年史編集室）

（なかのみのる 〃 〃）